

学位論文要約

「子どもの論理」をいかした教育実践理論の開発 —小学校国語教育を中心に—

- I. 論文の構成
- II. 研究の目的
- III. 研究の方法
- IV. 研究の意義
- V. 各章の概要
- VI. 参考文献

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期
学習開発専攻 カリキュラム開発分野

春木 憂

I. 論文の構成

序章

1. 問題の所在
2. 研究の目的
3. 研究の方法
4. 研究の意義

1. 教科教育における「子どもの論理」

- 1.1. 先行研究の概観
- 1.2. 国語科教育研究における先行研究の分析と考察
 - 1.2.1. 先行研究の概要
 - 1.2.2. 先行研究の分析
 - 1.2.3. 考察
- 1.3. 各教科教育研究における先行研究の分析と考察
 - 1.3.1. 先行研究の概要
 - 1.3.2. 先行研究の分析
 - 1.3.3. 考察
- 1.4. 教科教育における「子どもの論理」研究の必要性

2. 「子どもの論理」を解明する理論的枠組み –REBT の検討–

- 2.1. REBT に関する先行研究の分析と考察
 - 2.1.1. 先行研究の概要
 - 2.1.2. 先行研究の分析
 - 2.1.3. 考察
- 2.2. REBT に関する先行実践の分析と考察
 - 2.2.1. 先行実践の概要
 - 2.2.2. 先行実践の分析
 - 2.2.3. 考察
- 2.3. 「子どもの論理」の再定義

3. 教育実践理論の構築 –「子どもの論理」の実態とかかわり方の検討–

- 3.1. 「子どもの論理」についての予備調査
 - 3.1.1. 目的
 - 3.1.2. 概要
 - 3.1.2.1. 実施方法
 - 3.1.2.2. 分析方法
 - 3.1.2.3. 実際の調査
 - 3.1.3. 結果
 - 3.1.3.1. N 児の日記についての記述分析
 - 3.1.3.2. N 児の言動および行動についての分析
 - 3.1.3.3. N 児の「子どもの論理」
 - 3.1.3.4. O 児の日記についての記述分析
 - 3.1.3.5. O 児の言動および行動についての分析
 - 3.1.3.6. O 児の「子どもの論理」
 - 3.1.4. 「子どもの論理」へのかかわり方の検討
 - 3.1.4.1. N 児の「子どもの論理」へのかかわり方
 - 3.1.4.2. O 児の「子どもの論理」へのかかわり方
 - 3.1.5. 総合考察

- 3.2. 「子どもの論理」についての調査①
 - 3.2.1. 目的
 - 3.2.2. 概要
 - 3.2.2.1. 実施方法
 - 3.2.2.2. 分析方法
 - 3.2.2.3. 実際の調査
 - 3.2.3. 結果
 - 3.2.3.1. 日記の提出実績についての分析
 - 3.2.3.2. 日記の記述内容についての分析
 - 3.2.3.3. 児童2の日記にかかわる記述, 言動, 行動についての分析
 - 3.2.4. 考察
 - 3.3. 「子どもの論理」についての調査②
 - 3.3.1. 目的
 - 3.3.2. 概要
 - 3.3.2.1. 実施方法
 - 3.3.2.2. 分析方法
 - 3.3.2.3. 実際の調査
 - 3.3.3. 結果
 - 3.3.4. 考察
 - 3.4. 総合考察
 - 3.5. 「子どもの論理」をいかした教育実践理論の構築
 - 3.5.1. 先行研究および実践からの検討
 - 3.5.2. 実態調査からの検討
 - 3.5.3. 「子どもの論理」をいかした国語教育実践理論
4. 「子どもの論理」をいかした国語教育実践①の実際と検討 ―単元「物語の解説者になろう！」の場合―
- 4.1. 国語科授業の実際と検討
 - 4.1.1. 授業の概要
 - 4.1.2. アンケートの概要
 - 4.1.3. チェックシートの概要
 - 4.2. 調査の結果と考察
 - 4.2.1. アンケート結果の分析と考察
 - 4.2.1.1. 分析
 - 4.2.1.2. 考察
 - 4.2.1.3. 授業と関連させた考察
 - 4.2.2. チェックシート結果の分析と考察
 - 4.2.2.1. 分析
 - 4.2.2.2. 考察
 - 4.2.2.3. 授業と関連させた考察
 - 4.3. 総合考察
5. 「子どもの論理」を活かした国語教育実践②の実際と検討 ―単元「朗読劇をつくろう！」の場合―
- 5.1. 国語科授業の実際と検討
 - 5.1.1. 授業の概要
 - 5.1.2. アンケートの概要
 - 5.1.3. チェックシートの概要
 - 5.2. 調査の結果と考察
 - 5.2.1. アンケート結果の分析と考察
 - 5.2.1.1. 分析
 - 5.2.1.2. 考察
 - 5.2.1.3. 授業と関連させた考察

- 5.2.2. チェックシート結果の分析と考察
 - 5.2.2.1. 分析
 - 5.2.2.2. 考察
 - 5.2.2.3. 授業と関連させた考察
- 5.3. 総合考察

- 6. 「子どもの論理」の連続性を見据えたカリキュラム開発 ―幼保小連携の視点から―
 - 6.1. 小1プロブレムの実態
 - 6.2. 幼保小接続期の課題と乗り越え
 - 6.2.1. 課題
 - 6.2.2. 課題の乗り越え
 - 6.2.3. 提案
 - 6.3. 幼保小接続期の保育・教育に必要な要素
 - 6.3.1. 問題をひき起こす要因の捉え直し
 - 6.3.2. 事例についての考察
 - 6.3.3. 各事例の子どもへの対応案
 - 6.3.4. 考察
 - 6.4. 「子どもの論理」をいかした保育・教育実践
 - 6.4.1. 接続期の保育・教育と「子どもの論理」
 - 6.4.2. 「子どもの論理」をいかした保育・教育実践
 - 6.4.3. 教育実践の提案
 - 6.4.4. 保育実践の提案
 - 6.4.5. 総合的な提案
 - 6.5. 幼保小連携への展望

終章

- 1. 本研究の成果
- 2. 本研究の課題
- 3. 今後の展望

参考引用文献

II. 研究の目的

本研究において柱となる目的は、様々な背景をもつ児童の抱える課題の解決を目指した教育の在り方を見出すことである。解決の方向は、先述したように、児童一人ひとりが、自己実現に向けて自分の力で歩んでいけるような「子どもの論理」を持つことである。

そのためには、他者の論理と齟齬を来すことによって生じる課題を、自分の力で解決できるようになる必要がある。他者の論理を正確に理解し、「子どもの論理」を自己実現に向かえるよう柔軟に変容させつつ、適切に表現することである。つまり、論理力の育成が必要だと考えられる。

そういった論理力を身につけるためには、論理の型や枠組みを学ぶだけでは不十分である。さらに深部に目を向け、児童一人ひとりが内在させている「子どもの論理」の実態を掴むことが論理力育成の前提となる。

本研究においては、ある出来事についての児童の受けとめ方から言動や行動に至るまでを「子どもの論理」と考える（定義の詳細については、「2.3. 「子どもの論理」の再定義」で述べる）。そして、なぜそのような感情をもったのか、なぜそのように行動せざるを得なかったのかという点に注目する。

そのうえで、児童の「子どもの論理」にどのようにかかわることが適切であるかについて提案したい。ただし、将来的に課題を解決すべき主体は、児童自身である。よって、長期的な目標を設定したうえで、中・短期的なかかわり方を検討していく。

そのために、「子どもの論理」を解明することを目的とし、「子どもの論理」に関わる理論の再検討をおこなう。そして、児童は感情や行動を含んだ一連の論理を内在させていると捉えた「子どもの論理」について定義し、児童の見方の一つとして提案する。

さらに、REBTというカウンセリング理論（「2.2. REBTに関する先行研究の分析と考察」参照）も合わせて援用し、小学校における実態調査によって「子どもの論理」の実態と、適切なかかわり方について明らかにする。その結果をもとに、「子どもの論理」をいかした教育実践理論を構築する。

続いて、構築された教育実践理論をもとに、小学校国語教育実践を計画、実践し、分析をおこなうことによって、「子どもの論理」をいかした教育実践の有効性を検証する。特に、児童のもつ幸福感、「子どもの論理」の変容、児童の読みや推論について考察することによって、本研究で提案する教育実践理論がどのような意味をもつのかについて明らかにする。

最後に、「子どもの論理」をいかした教育実践についての研究成果をもとに、幼保小連携の視点から課題を整理し、小学校「国語科」、保育内容「言葉」における、読むことを中心とした実践について提案する。

本研究の目的を整理すると、次の4点になる。

- ①「子どもの論理」に関する理論研究をし、学術的に位置づける。
- ②教育現場において児童がどのような「子どもの論理」を展開しているかについて調査し、実態を明らかにした上で、「子どもの論理」との適切なかかわりについて、考え方や方法を提案する。
- ③「子どもの論理」をいかした国語教育実践について実践・検証し、成果と課題を明らかにする。
- ④①～③の成果をいかした幼保小連携のあり方を考える。

Ⅲ. 研究の方法

目的①については、第1章・第2章において、文献研究を中心にしながら、人生哲学感情心理学会等からも知見を得る。そして、「子どもの論理」の定義に関わると考えられる領域やREBTについて理論研究をおこなう。また、「子どもの論理」にかかわる教科教育研究について文献を分析する。以上から得られた知見を整理し、「子どもの論理」について学術的に位置づける。

目的②については、第3章において、小学生児童を対象とした実態調査を実施する。その結果を分析するために、先行実践・理論の調査を文献研究で行い、「子どもの論理」について分析の手立てを案出する。そのうえで、学校生活全般の言動や行動、面談、日記を対象として、言動や行動、会話、記述を分析することによって、「子どもの論理」の実態を総合的に把握する。ここでは、主にREBTにおけるピリーの捉え方、ABC理論を援用する。その上で、学校生活全般における「子どもの論理」について、本人や他者がどのようにかかわることが適切か検討する。つまり、実践理論を構築し、「子どもの論理」へかかわる際の基本的な考え方や具体的な方法を提案する。

目的③については、第4章・第5章において、「子どもの論理」をいかした国語教育実践について、先行実践・研究の調査および検討をおこなう。そして、課題解決の方法について、国語科授業を中心とした学校生活全般の言動や行動、面談、日記を対象として実践を試みる。その結果を用い、言動や行動、会話、記述を分析することによって、「子どもの論理」へのかかわり方（ここでは、特に教師）について検証する。実践の具体として、構築された教育実践理論をもとに、小学校第3学年を対象とした、小学校国語教育実践を論者がおこない、検証をおこなう。検証の際には、ABC理論、ピリーの考え方を援用する。

目的④については、第6章において、「子どもの論理」をいかした教育実践についての研究成果をもとに、幼保小連携の視点から課題を整理し、小学校「国語科」、保育内容「言葉」における、読むことを中心とした実践について提案する。そのために、幼保小連携についての先行研究において提起される課題について整理する。ここでは、幼保小連携の視点から、子どものもつ「子どもの論理」について検討するために、幼保との接続期にあたる小学校1年生の抱える課題である小1プロブレムに着目する。そして、それらを解消する一つの方策として「子どもの論理」研究の重要性を示す。さらに、幼保小連携の視点から、保育内容「言葉」、国語科教育における、保育・学習指導計画を提案する。

IV. 研究の意義

第一に、「子どもの論理」をいかした教育実践理論は、国語教育における新たな提案であるという点である。国語教育を中心とした「子どもの論理」をいかした教育実践は、教科教育としての国語科教育と往還するものである。児童の表出する言動や行動の背景にある「子どもの論理」をいかすことによって、国語科で求められる知識や技能の習得や活用を促すことができるからである。

そして、教科教育での学びが「子どもの論理」をよりよいものに変容させる力にもなるのである。こういった、「子どもの論理」と教科教育との往還を前提に、本研究における教育実践理論の提案は、国語科教育研究に資するものであると考える。

第二に、児童の他者理解や児童を取り巻く他者の児童理解についての提案であるという点である。集団生活の場では、児童の言動や行動に、児童自身が悩み、迷い、苦しんでいる。そして、それを取り巻く他者（児童、保護者、教員等）も理解ができず、悩み、迷い、苦しんでいるという現状がある。本研究では、児童の言動や行動の背景として存在する「子どもの論理」について実態を明らかにすることによって、児童や周囲の他者が、自分自身を理解し、他者を理解する具体的な方法を提案できると考える。

第三に、他者へのかかわり方や児童のセルフヘルプについての提案であるという点である。本研究では、子どもが、自身の「子どもの論理」に悩み、迷い、苦しんでいる現状を打開できるようになること、そして、他者が、「子どもの論理」に適切にかかわることができるようになることを目指している。その対象は、喧嘩や暴力、暴言、飛び出しといった学校現場で問題として取り上げられる言動や行動を表出する児童であり、一見問題のない様子を表出しながらも今後の不安材料を抱えている児童であり、自己実現に向けて歩んでいる児童である。つまり、学校に存在するすべての児童のもつ「子どもの論理」にアプローチ可能な実態把握の方法やかかわり方の提案を試みるものである。よって、「子どもの論理」をいかした教育実践をおこなうことによって、児童自身が、自分のもつ「子どもの論理」とのかかわり方を見いだすことも可能になると考える。

本研究は、「子どもの論理」という視点から、国語教育実践の在り方を提案するものである。一方で、幼稚園・保育所・小学校など、子どもが他者とかかわり合わざるを得ない環境で、自分や他者の言動や行動、その背景にある「子どもの論理」について、子ども自身や保育者・教師がどのように理解し、かかわることが適切なのかについて考える過程において、一つの方策を提案できると考える。

V. 各章の概要

1. 教科教育における「子どもの論理」

本章では、国語科、算数科、社会科、理科教科教育研究における、「子どもの論理」にかかわる論考を整理することによって、国語科教育における学習者研究の成果と課題を分析する。そして、その結果をもとに、「子どもの論理」をいかした教育実践の必要性について述べたうえで、本研究の位置づけを明らかにする。

CiNiiによる論文検索(2016. 9)の結果、1995～2016年に出版された「子どもの論理」に関する論考は、57点であった。そのうち、教科教育研究に位置づけられるもの、題目あるいは文中に「子どもの論理」あるいは「素朴概念」という用語を用いているもの、研究内容に、「子どもの論理」あるいは類似する概念(「素朴概念」「学習者」等)を扱っているもの、小学生を対象としているものという条件を満たすものは、17点であった。また、同じく「素朴概念」に関する論考は、284点であった。そのうち、条件②～⑤を満たすものは、103点であった。その内訳は、表1のとおりである。

国語科教育研究において、「子どもの論理」あるいは「素朴概念」を研究の対象としている論考は、1995年から2016年にかけて見られない(表1)。そこで、前述した学習者研究領域が「子どもの論理」と近接する概念を対象としていると考え、その視点を含んだ論考を抽出した。

先行研究分析の結果、国語科教育研究における学習者研究では、児童が、学習内容とどうかかわるのかという点が分析の対象となっていることが分かった。読むことの対象はテキストであり、作品の筆者である。また、話すこと・聞くことの対象は聞き手や話し手であり、話したり聞いたりする内容である。つまり、児童が他者とどのように向き合い、かかわるかという点が重要視されている。そして、それらについて、発達という視点から研究がおこなわれている。

児童の学習の営みを、他者との関係性として、また、発達的に捉えるこれらの知見は、国語教育の在り方について考えるうえで欠かせないものである。学習の主体である学習者に目を向けることによって、学習の実相がより明らかになるからである。

一方、課題として、学習場面における児童の姿は、あくまで表層であるという点が挙げられる。なぜなら、児童の表出する言動や行動、記述等には、それらを突き動かしている、児童それぞれの背景が存在するからである。つまり、学習者である児童が内在させている論理(「子どもの論理」)が存在するのである。これは、児童の体験や経験から積み上げられたものである。そして、程度の違いはあるものの、学習場面における理解や思考に大きな影響力を持つ。その結果、学習内容の理解を促進したり阻害したりするものである。なぜなら、児童の感情や思考、行動は、自身に内在する論理に影響を受けて発するものだからである。

そして、児童が内在させている論理に迫るためには、当然児童一人ひとりに目を向ける必要がある。この点については、原田(2009)が、従来の学習者研究が学習者を集団の単位だけで捉えてきたことにより、個が抱えている困難を理解したり、個に必要な「ことばの学び」を検討したりするものになり得ていなかったことを課題として指摘していることと通じる。

これらの点から、学習場面における学習者の表層を捉えるだけでは、河野(2015)が述べる「学びを成立させ、社会に生きて働く力を学習者側から育てていく」(p.37)ことを実現するには不十分だと考えられる。

そして、国語科教育研究から明らかのように、学習者である児童がある事柄について学習する際、その学習内容のもつ論理(「他者の論理」の一つ)と様々にかかわることになる。そのかかわりの様相について、より正確に理解し、精緻に分析し、適切な指導の在り方を見出すためには、他者だけでなく、学習者である児童が内在させている論理についても研究の対象とする必要がある。

表1 「子どもの論理」研究の分類

	子どもの論理	素朴概念	計
国語	0	0	0
算数	4	4	8
生活	1	3	4
理科	8	93	101
社会	1	1	2
図工	1	0	1
音楽	0	0	0
体育	2	2	4
計	17	103	120

さらに、国語教育の目標を全人的な母語教育であると捉えるならば、読みや談話等の文脈における学習者のあり様や変容に加えて、その背景にある「子どもの論理」に目を向けることの必要性は瞭然たるものとなる。学習者である児童が、生活において、さらに言えば、その人生において国語科教育で学んだ読みやコミュニケーションや論理的思考を活用できることが国語教育の目標だといえるからである。そのために、国語科教育の学習の場で、「子どもの論理」に迫り、はたらきかけることが重要であると考えられる。

続いて、算数科、社会科、理科について、「子どもの論理」を中心的な研究、分析対象とした、各教科2論考、計6論考を抽出した。これらの論考について、その概要を整理し、論者の見解を述べた。そして、その結果をもとに、各教科の授業における「子どもの論理」の捉え方及び必要性について概観した。

国語科以外の教科教育研究から、「子どもの論理」は「教科の論理」と対置されるものであり、児童の学習内容についての理解に影響を及ぼすものであると捉えられていることがわかった。それゆえ、授業においては、「子どもの論理」を理解し、適切にかかわることが必要とされる。その結果、学びの質を高めることになり、社会認識の成立に繋がっていくということが読みとれた。ここに、教科教育における学習者研究（なかでも、「子どもの論理」研究）の意義が示されている。

また、本研究で取り上げた論考の分析対象は、国語科と同じく授業場面や児童の記述であり、「子どもの論理」の発達を捉えようとするものである。その過程においては、児童の背景に迫ることを重視していた。つまり、学習場面における「子どもの論理」は、その表層にとどまらず、学習者の背景をも含み込むものとして位置づけられる。

一方、国語科教育研究再考の視点からみえる課題として、「子どもの論理」や「素朴概念」の修正を目指すという基本姿勢が挙げられる。これは、「子どもの論理」や「素朴概念」の多くが誤概念であることから導出された方向性であると考えられる。科学的概念の獲得が教科の目標である場合、自ずと「子どもの論理」に対する評価や判断の基準は正誤ということになる。この点については、国語科の目標に照らした際、必ずしも有効であるとはいえない点である。

国語科においても、学習者である児童から出発し、子どもの変容を見取る教科教育研究の必要性が認められつつある。冒頭で述べたように、国語科教育においても学習者研究が提唱されるようになってきているのである。

学習者研究は、「学習効果の向上／学習における一般法則の解明／個別も若しくは一般的な学習事実の認識と記述等」を目的としている。また、その対象は、「資質、性格等、学習者の心身の発達特性／学習態度、学習活動、学習成果等、教育実践場面において産み出される学習事実／居住地域、家庭、人間関係等、学習者を取り巻く諸環境」である（藤森、2013、p.521）。

学習者である児童が学習内容を理解すること、さらには、学習内容を身につけることを実現するためには、まず、学習者に目を向ける必要があるということである。そして、学習場面での事実だけでなく、その背景をも対象にしていく必要があるということである。

このことをふまえて、論者は、修正の対象として学習者の「子どもの論理」を捉えるのではなく、それをいかすための研究が必要であると考えている。このことは、国語科教育における論理的思考力育成を目指した学習についても同様であろう。これまで論理的思考力育成を目標に掲げた実践は数多くおこなわれ、様々な成果と課題が報告されてきた。論者は、これらの課題を解決するための一方策として学習者研究の視点を取り入れることを提案したい。なぜなら、論理的思考とは、感情や信念、情動等から切り離されるものではなく、密接にかかわりあっているものだからである。ゆえに、学習者としての児童について理解しようとする場合、学習場面で得られる事実にとどまることなく、一人ひとりの背景までも見取ることが求められる。思考や感情、信念、情動といった児童に内在するものは、その環境や成育過程において積み上げられ、形づくられてきたものだから、切り離して理解することはできないのである。

そして、指導の過程では、児童それぞれのもつ「子どもの論理」にはたらきかけることが重要な意味をもつ。論理的説明だけでは、暗黙のモデルの解消には至らず（岡崎，1999，p.43），児童に内在する「子どもの論理」にはたらきかけることができないからである。

したがって論者は、全人的な母語教育を担う国語教育における論理的思考力育成では、学習者理解の一環としての「子どもの論理」に着目した研究が求められると考える。

つまり、「子どもの論理」をいかすことと、国語科教科内容を学習することとの二つを統合した教育である。これまでの教育実践において分断されてきた、児童理解と教科指導とを繋ぐ国語教育（国語科教育ではなく）が必要であると考え。したがって、発達研究に加えて、「予測不可能事象」のもつ意味をさらに深く掘り下げ、学習者の姿をより正確に見取るために、個々の子どもの背景に迫る「子どもの論理」研究が必要であると考え。

2. 「子どもの論理」を解明する理論的枠組み —REBTの検討—

本章では、「子どもの論理」の実態を明らかにするために援用する REBT（Rational Emotive Behavior Therapy）について、その理論を概説する。さらに、各種学校における REBT に関する先行実践の分析をおこない、「子どもの論理」研究の実際について考察する。これらの結果をもとに、「子どもの論理」について再定義する。

「子どもの論理」との向き合い方を探るうえで、まず「子どもの論理」を理解することが必要であると考えられる。なぜそういった論理が展開されるのか、どういった背景からそういう論理を展開するに至ったのかについて理解できれば、「子どもの論理」に寄り添うことが可能になり、適切な指導の在り方を見出す手がかりになると推測されるからである。そこで本研究では、「子どもの論理」を理解する一つの方策として、REBT を援用することとし、概要を示し、分析と考察をおこなう。

「REBT（Rational Behavior Emotive Therapy）」とは、アルバート・エリス（Albert Ellis,1913-2007）によって 1955 年頃から提唱され始めた心理療法である。重視しているのは、「思考、感情、行動のいずれにおいても適切なものと不適切なもの、論理的なものと非論理的なものとを明確に区別していく理論」（Ellis and Harper, 1981, p. 303）である。REBT では、思考、感情、行動について、論理と分離したものではなく、不可分であり、連関したものとして捉えている。その視座に立って、表出する言動や行動を分析し、カウンセリング等を通してはたらきかけようとするものである。

菅沼（2013）は、REBT の目的について、「感情及び行動の問題解決」（p.11）であると述べている。そして、REBT の目標については、「健康な人間に成ること」（p.15）であるとしている。REBT でいう「健康」とは、「生き抜くこと」であり、さらに「人生を楽しむこと」である。

このような目標、目的に基づいて構築された、REBT の基礎理論である ABC 理論、ビリーフについての考え方を中心に、先行研究や先行実践についての分析、考察を踏まえて、本研究における「子どもの論理」について再定義する。

本研究では、児童の表出する言動や行動、記述等には、それらを突き動かしている、児童それぞれの背景が存在するという仮説に基づき、学習者である児童が内在させている論理（「子どもの論理」）の実態を明らかにしようとしている。この「子どもの論理」は、児童の体験や経験から積み上げられたものである。そして、程度の違いはあるものの、学習場面における理解や思考に大きな影響力を持つ。その結果、学習内容の理解を促進したり阻害したりするものである。なぜなら、児童の感情や思考、行動は、自身に内在する論理に影響を受けて発するものだからである。

こういった視点に立った場合、「子どもの論理」は、子どもの思考や感情のみを指すものではないという仮説に至る。つまり、ある出来事についてどのように受けとめ、感じ、考え、行動するかという一連の流れ全体を「子どもの論理」と定義し、研究の対象とすることが求められるのではないだろうか。

REBTでは、思考、感情、行動について、論理と分離したものではなく、不可分であり、連関したものとして捉えている。その視座に立って、表出する言動や行動を分析し、カウンセリング等を通してはたらきかけようとするものである。この点において、「子どもの論理」に表層からさらに踏み込んで子どもの背景を捉えようとする際に、有効な理論であると考えている。

ただし、「子どもの論理」について想定する場合、子どもの言動や行動が未分化であり、未成熟であることを考慮する必要がある。ビリーフのみに注目するだけではなく、その言動や行動を選択した事実についても分析の対象とすることが重要であると考えている。

Ellis and Harper (1981)は、「論理的であること」を「合理性を示すこと。愚かであったり、良識を失ったりしないこと。思慮分別があること。最小の労力と費用で、不必要な努力や不快な副次効果を最も少なくして、希望する結果を生み出すこと (p.104)」と定義している。そして、「より幸福な生活を求め、自己実現を追求して生活しようと努力する時、その人の人生は論理的なものになるのである。論理的に行動していくことによって、実は楽しく行動し(かつ感じ)ていくことができるのである (p.104)」と説明している。

論理的に行動するためには、ラショナルビリーフに基づいて出来事を受けとめ、さらに、ラショナルビリーフに基づいて表出することが必要であると考えている。

REBTの骨子であるABC理論の図中に、本研究において、「子どもの論理」として定義する部分を示す。

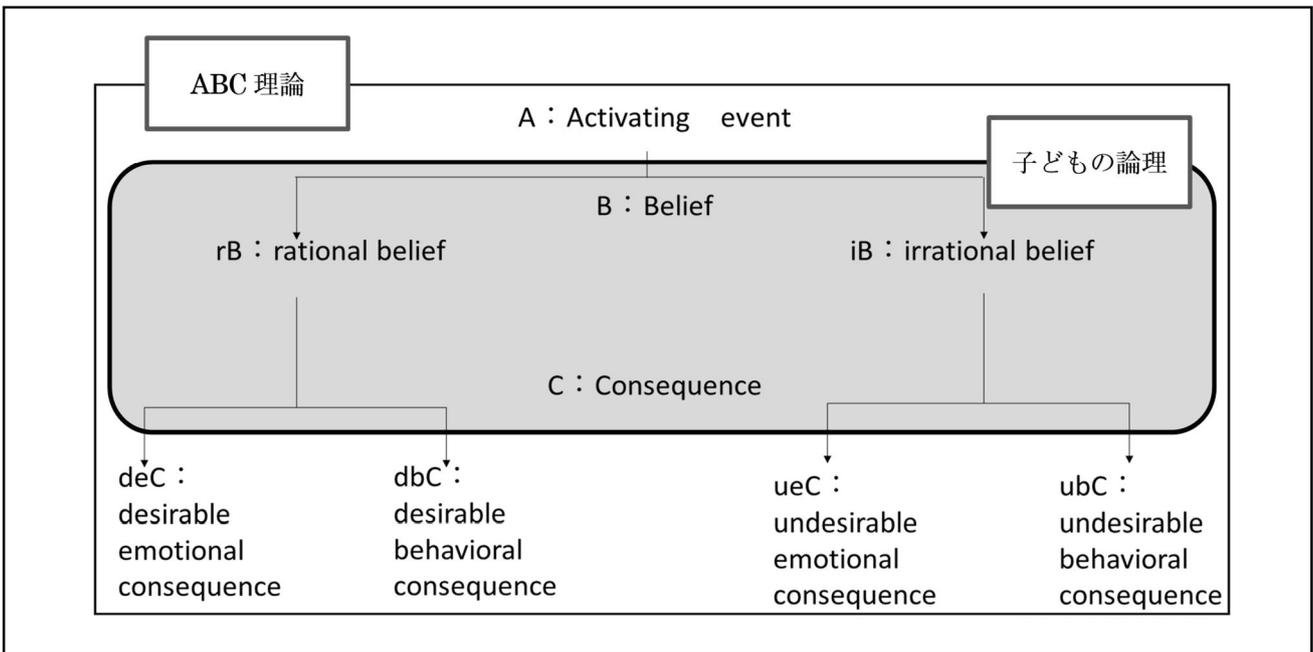
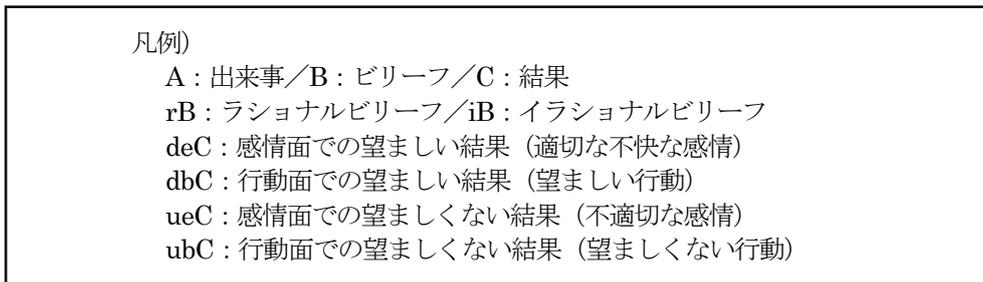


図1 「子どもの論理」の定義

以上から、本研究における「子どもの論理」について、次のように定義する。

子どもの一人ひとりが内在させている、出来事の受けとめ方、
それに対する言動や行動といった表出の仕方を含む、信念や認知

また、「子どもの論理」は、次のような特徴があるものとする。

- ・ラショナルなものと同ラショナルなものに大別することができる。ラショナルな「子どもの論理」とは子ども自身を助けるものであり、イラショナルな「子どもの論理」とは子ども自身を傷つけるものである。
- ・「子どもの論理」は、感情的、行動的、身体的結果を導くものである。
- ・論駁や介入によって変容や修正が可能なものである。

3. 教育実践理論の構築 — 「子どもの論理」の実態とかかわり方の検討—

本章では、「子どもの論理」の実態を明らかにするために、小学校で実態調査を行った。まず、予備調査で得た児童の日記の記述等をもとに、「子どもの論理」について REBT を援用して質的な分析をおこない、適切なかかわり方を検討する。そして、調査①②で得た児童の日記の記述等をもとに「子どもの論理」について REBT を援用した分析および考察をおこない、「子どもの論理」の実態を明らかにする。さらに、それらに基づいて、先行研究を参考にしながら、「子どもの論理」をいかした教育実践理論を構築する。

○ 「子どもの論理」についての予備調査

- ・対象校および学年：W 小学校 4 年 2 組 29 名
- ・時期：2016 年 2 月 29 日（月）～3 月 3 日（木）
- ・方法：定点での動画収録（授業を中心に学校生活全般）、個別対応の記録（学校生活全般）
児童、担任の聞き取り（学校生活全般）、児童の記述（日記）

分析については、「子どもの論理」を理解するために、REBT を援用した。また、分析の観点としてラショナルビリーフ、イラショナルビリーフを設定し、抽出した 2 名の児童について、調査を実施した 4 日間に得られた日記の記述分析と、言動や行動を加えた総合的な分析をおこなった。

本項では、文字資料や行動観察、聞き取りを対象とした調査および分析結果から、児童の言動や行動の背景に「子どもの論理」が存在することが確認された。

また、日記等の文字資料や行動観察、聞き取りを対象として、REBT におけるラショナル・ビリーフ、イラショナルビリーフを援用した記述分析や行動分析を総合的におこなうことによって、児童それぞれの表出する言動や行動の背景にある「子どもの論理」の実態についての考察が可能となることが分かった。つまり、予備調査で実施した方法を用いることによって、「子どもの論理」がみられるということが確認された。

ここでは、次のような「子どもの論理」の実態が観察された。

- ・児童の中には、複数のビリーフが存在する。
- ・一つの出来事に対して、複数のビリーフがかかわる場合がある。
- ・複数のビリーフは、複雑かつ重層的な関係性をもつ。
- ・「子どもの論理」を理解するためには、多面的に観察し、総合的に考察する必要がある。

○ 「子どもの論理」についての調査①

- ・対象校および学年：W 小学校 3 年 1 組 27 名
- ・時期：2016 年 5 月 23-27 日／2016 年 6 月 13-17 日／2016 年 7 月 11-15 日／2016 年 9 月 12-16 日／
2016 年 10 月 17-21 日／2016 年 11 月 7-11 日／2016 年 12 月 5-9 日／2017 年 1 月 16-20 日／
2017 年 2 月 13-17 日／2017 年 3 月 6-10 日（すべて月～金）

- ・方法：定点での動画収録（授業を中心に学校生活全般）、個別対応の記録（学校生活全般）
児童，担任の聞き取り（学校生活全般），児童の記述（日記）

分析については、「子どもの論理」を理解するために、REBTを援用した。まず、日記の提出率について量的分析をおこなった。また、分析の観点としてビリーフを設定し、日記の記述内容について量的分析をおこなった。さらに、抽出した1名の児童について、日記の記述分析と、言動や行動を加えた総合的な分析をおこなった。

本項においても、文字資料や行動観察、聞き取りを対象とした調査および分析の結果から、児童の言動や行動の背景に「子どもの論理」が存在することが確認された。

また、予備調査で実施したように、日記等の文字資料や行動観察、聞き取りを対象として、REBTにおけるラショナル・ビリーフ、イラショナルビリーフを援用した記述分析や行動分析を総合的にこなうことによって、児童それぞれの表出する言動や行動の背景にある「子どもの論理」の実態が明らかになった。

ここでは、予備調査で観察された、次のような「子どもの論理」の実態が確認された。

- ・児童の中には、複数のビリーフが存在する。
- ・一つの出来事に対して、複数のビリーフがかかわる場合がある。
- ・複数のビリーフは、複雑かつ重層的な関係性をもつ。
- ・「子どもの論理」を理解するためには、多面的に観察し、総合的に考察する必要がある。

また、結果を総合すると、「子どもの論理」へのかかわり方として、次の点に留意することが必要であると考えられる。

- ・児童が、自分や他者と向き合うために、適切な時間と空間を確保すること。
- ・書く活動の場合、「子どもの論理」を表出しやすい様式を工夫すること。
- ・児童が、自身の考えを省み、他者の考えを知る場面を設定すること。
- ・全体的なかかわりと個別的なかかわりを組み合わせること。

○「子どもの論理」についての調査②

- ・対象校および学年：W小学校3年児童8名
- ・時期：2016年12月7-9日／2017年1月17-20日
- ・学習材：『アライバル』，作・絵：ショーン・タン（Shaun Tan），訳：小林美幸
- ・方法：言動や行動の観察記録（読む，書く活動を中心に学校生活全般）

手紙（児童⇄学習材提供者：山元隆春氏／広島大学）の記述

分析については、「子どもの論理」を理解するために、REBTを援用した。分析の観点としてビリーフを設定し、読書活動における8名の児童の行動観察について、質的分析をおこなった。さらに、抽出した3名の児童について、手紙の記述分析と、言動や行動を加えた総合的な分析をおこなった。

調査②の結果から、「子どもの論理」をいかした教育実践について、次の点に留意することが必要であると考えられる。

- ・読む活動の場合、「子どもの論理」の表出を促す学習材を選定すること。
- ・書く活動の場合、他者意識をもたせるような活動を設定すること。
- ・「子どもの論理」を交流する活動を設定すること。
- ・「子どもの論理」が否定されない状況を整えること。
- ・「子どもの論理」を受けとめ、適切に評価すること。
- ・「子どもの論理」をひき出し、他者の論理と交流させ、変容を促すような介入の方法を工夫すること。
- ・意欲を高めるような、学習材や介入の方法を工夫すること。

調査①②の結果から、特に、児童2の変容をみると、個別的なかかわりにおいては、REBTカウンセリングの、感情的、行動的問題をひき起こす中核となる思考パターンに介入するという要素を取り入れることが有効であると考えられる。

児童の日記については、内容はもちろん、その提出率や分量からも「子どもの論理」を推測する手がかりとなることが明らかになった。そして、児童それぞれのもつ「子どもの論理」にアプローチすることによって、論理的な思考を促すこと、より豊かな自己表現としての書く力を育成することが望めることが示唆された。

そして、全調査で対象とした日記を書く活動、調査②の作品を読む活動、手紙を書く、読む活動についての結果から、児童のもつ「子どもの論理」をいかした国語教育実践が、児童の「子どもの論理」の変容を促し、将来的なセルフヘルプに繋がることが展望された。

○「子どもの論理」をいかした教育実践理論の構築

先行研究および先行実践からの検討をおこなった。国語科授業の実践理論として難波他（2007）より文学体験における「参加、同化、対象化、典型化」の過程を経験することによって、「子どもの論理」をいかした教育実践の可能性を見いだすことができた。

続いて、児童の読む活動における理解のプロセスや指導の具体について、Ellin（2014）の示す「理解のための7つの方法」（p.38）について、検証した。関連づける、質問する、イメージを描く、推測する、何が大切かを見極める、解釈する、修正しながら意味を捉えるという、これらの、児童が文章を読んだり、作品を読んだりする場合の理解のための7つの方法について、すべて方法の背景に「子どもの論理」が存在すると考えられる。そのため、これらの方法を使いこなし、また、文章を理解できるようになるためには、「子どもの論理」をいかした教育実践が必要である。

それでは、具体的にどのような方法が必要なのか。子どもを対象とした教育実践を構築するにあたって、REBTにおける子どもへのかかわり方を検討した。

子どもを対象としたREBTから、次の7点を抽出することができた。

- ・児童のロールモデルとして、言動や行動、指導の在り方を工夫する。
- ・思考パターンそのものへの介入は、よりよく育つための援助としておこなう。
- ・「思考と感情の関係」という視点を取り入れ、動きを使った活動を設定する。
- ・文学的文章の登場人物の論理や、説明的文章の筆者の論理を読みとる活動を設定する。
- ・児童の読みの見える化について工夫する。
- ・学んだことを活用する活動を設定する。
- ・児童の目線に合わせた目標や学習材、方法、言葉を工夫する。

ここまでの成果をもとに、「子どもの論理」をいかした国語教育実践理論を構築した。

「子どもの論理」をいかした教育実践理論を構築することが、本研究における目的の一つである。「子どもの論理」をいかすとは、児童が将来的にセルフヘルプできるようになることを長期目標とし、児童それぞれのもつ「子どもの論理」について分析的に明らかにし、適切にはたらきかけることである。

これまで述べてきたように、本研究の目的は、子どもの抱える課題の解決である。そして、子どもの抱える課題は、問題行動として表出している場合もあれば、子どもが内在させている場合もある。つまり、問題行動にどう対応するのかというテーマで「子どもの論理」にアプローチするのではなく、「よりラショナルに生きるために、どのように出来事を受けとめ、考え、行動を選択するのか」といった、どの子どもにも有用な理論であることが重要だと考える。

この点について、文学的文章の登場人物や説明的文章の筆者の、気持ちや意図を推論する過程について学ぶことは、Ellin（2014）の示す「推測する」という理解の方法を学ぶことである。「推測する」ことは、「自分独

自の意味をつくり出すプロセス」(<p.13>)であり、優れた読み手を育てるものである。この学びの過程が、現実世界において、表出する言動や行動から、その意図や背景を推論する過程に繋がると考えられる。

そこで、本研究では、国語科授業を中心とした国語教育実践理論を提案する。以下に示すのは、「子どもの論理」をいかした国語教育実践理論モデルである(図2)。

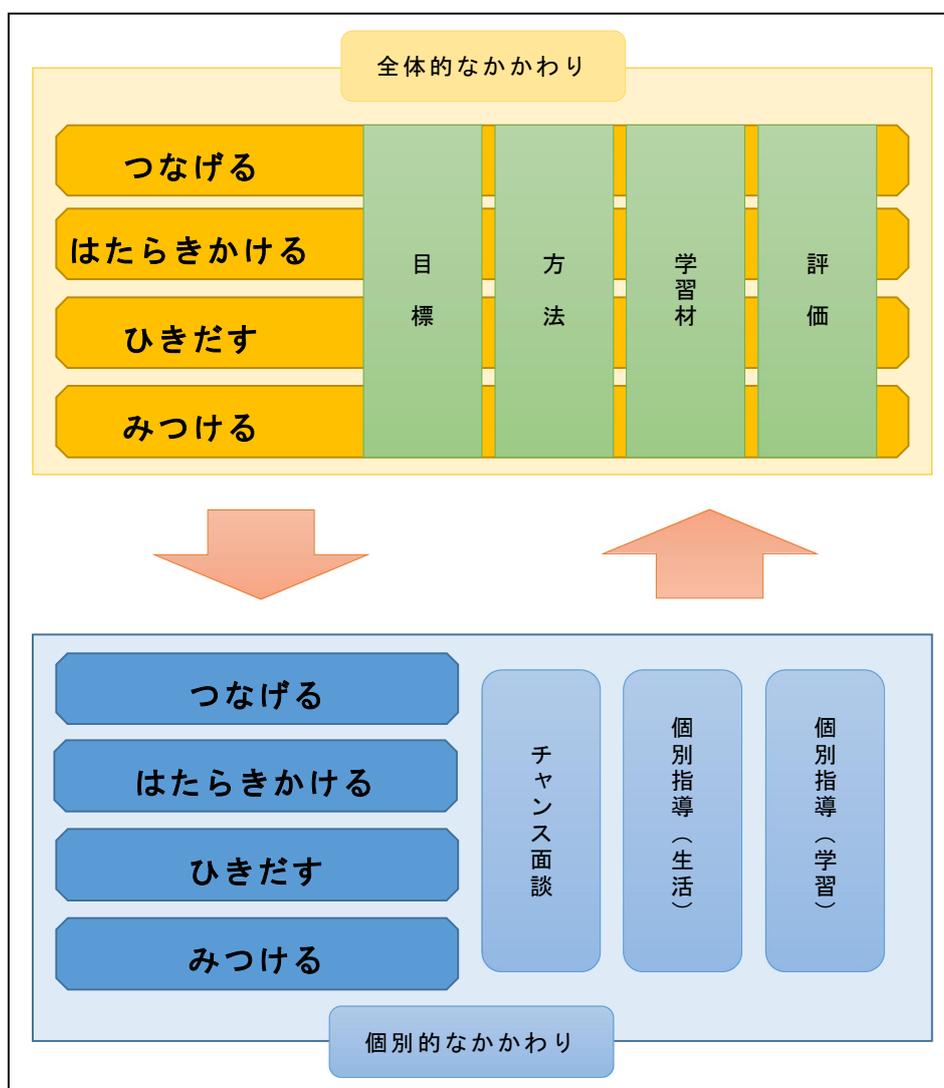


図2 「子どもの論理」をいかした国語教育実践理論モデル

まず、「子どもの論理」をいかした国語教育実践のステップとして、「子どもの論理」について、みつける、ひきだす、はたらきかける、つなぐという4段階を設定する。

「みつける」は、叙述や現実の言動や行動から、出来事と感情とを区別し、自分や他者が内在させている「子どもの論理」の存在を発見する段階である。例えば、文学的文章の登場人物の言動や行動について、何らかの考えがあることに気づくことである。

「ひきだす」は、前段階で存在のみを確認した、自分や他者の論理について、さらなる推論や意見交流、検討によって、明確化することである。例えば、文学的文章の登場人物言動や行動から、その背景にある論理の内容について推論することである。

「はたらきかける」は、自分や他者の論理にアプローチする段階である。例えば、文学的文章の登場人物の気持ちを推論した結果について、自分の論理と他者の論理とを比較することや、意見を交流することによって論理を変容させることである。

「つなげる」は、前段階で変容した自分や他者の論理を、他の場面や他の文脈に活用する段階である。例えば、国語科で学んだ推論を他教科の学習に適用することや、生活場面での言動や行動に反映させることである。

実践をおこなう場については、全体的なかかわりの場と、個別的なかかわりの場を設定する。

個別的なかかわりの場では、直接的に、「子どもの論理」にはたらきかけることができる。また、周囲に影響を受けることがないため、「子どもの論理」をひきだすことについての障壁が少ない。こういった点については、予備調査、調査①、調査②の結果からも支持される。

また、個別的なかかわりの場については、チャンス面談、生活指導を目的とした個別指導（個別対応）、学習指導を目的とした個別指導（個別対応）が想定される。チャンス面談については、児童の生活すべての場を対象に、必要に応じておこなう面談であり、指導することが前提ではない。そのため、児童がリラックスした状態で話すことができ、「子どもの論理」の表出を助けるものであると考える。学習指導を目的とした個別指導は、教科の論理と齟齬を来した場面でおこなわれることが多い。また、生活指導を目的とした個別指導は、他者の論理と齟齬を来した場面でおこなわれることが多い。そのため、問題行動の対応や指導の色彩が強い。こういった、児童にとって困難な状況において、「子どもの論理」にアプローチすることも重要である。

全体的なかかわりの場では、間接的に、「子どもの論理」にはたらきかけることができる。文学的文章を通して、話し合い活動を通して、といったイメージである。一方、直接的にはたらきかける場面もある。児童が文学的文章の同人物に同化している場合や、意見として「子どもの論理」を表出した場合等である。また、児童の言語生活全般を国語教育の場であると捉えると、学級一斉の生活指導、学年集会、学級会等も直接的なかかわりが可能な場であると考えられる。全体的な場では、多くの子どもの「子どもの論理」にはたらきかけることができる。そのため、子どもの生活する学級集団や学年集団等の環境を、ラショナルに整えることができる。

また、全体的なかかわりの場については、主に国語科授業が想定される。ここでは、学習材を通して「子どもの論理」にかかわることができる。文学的文章の登場人物や説明的文章の筆者の、気持ちや意図を推論する過程について学ぶことそのものが、「子どもの論理」にかかわることになるからである。

個別的なかかわりの場、全体的なかかわりの場を目的に応じて組み合わせ、いずれの場においても、「子どもの論理」について、みつける、ひきだす、はたらきかける、つながるという4段階を意識することが重要である。この4段階は、児童につけたい力でもある。児童がどの段階にあり、どの段階について学ぶことが適切かを見極め、目標、方法、学習材、評価を設定することによって、「子どもの論理」をいかした教育実践計画が立案できる。そして、「子どもの論理」をいかした教育実践を積み重ねることによって、次のような成果が得られると考える。

<教師>

- ・児童理解がより正確なものになる。
- ・適切に「子どもの論理」にかかわることができる。

<子ども>

- ・論理的思考力が育成される。
- ・「子どもの論理」がラショナルに変容する。
- ・将来的な児童のセルフヘルプに繋がる。

4. 国語教育実践①の実際と検討 ―単元「解説者になろう！」の場合―

本章では、先行研究および先行実践等から得た知見を踏まえ、REBTを援用して構築した小学校国語科授業をとりあげる。これは、論者が授業者として行った実践である。まず、実践授業の概要、結果について示し、児童のイラショナルビリーフの変容について分析する。続いて、目標、方法、学習材の視点から、「子どもの論理」をいかした国語教育実践について考察、検証する。

○調査

- ・対象校および学年：W小学校3年Y組（24名）、3年Z組（25名）
- ・時期：2017年6月5日（月）～23日（金）
- ・方法：ビデオカメラ、ICレコーダーによって収録した動画、音声
学習プリント、チェックシート、アンケート、リフレクションシートの記述

○単元名：物語の解説者になろう！

○学習材名：「ゆうすげ村の小さな旅館」茂市久美子（『新しい国語 三上』東京書籍）

○単元目標

- ・場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。（技能目標）
- ・目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりすること。（技能目標）
- ・物語に興味を持ち、物語について解説しようとする事。（態度目標）
- ・文章を読んで考えたことを伝え合い、一人ひとりの感じ方に違いのあることに気づくこと。（価値目標）

○学習指導過程（全10時間）

第1次 物語にであい、大体的内容をとらえよう（2時間）

第2次 つぼみさんはいつ美月さんがうさぎだと気づいたのだろう（5時間）

第3次 物語の解説者になろう（3時間）

「子どもの論理」をいかした教育実践理論に基づく、国語科授業をおこなった結果の量的分析から、児童のイラショナルビリーフの軽減がみられた。それとともに、情報の取り出しや推論についての向上がみられた。これは、「子どもの論理」と国語科で求められる力が相互にかかわっていることによるものであると考えられる。また、「子どもの論理」をみつけ、ひき出し、はたらきかけ、つなげることによって、正確に読むことや豊かに想像することができるようになる可能性を示している。

本章では、かかわりの過程において、対外的に問題行動を起こしたり、自己内にジレンマを抱えたりしている子どもの抱える課題の根本的な解決を目指し、これまでの研究で得た知見をもとに構築した国語科授業を実践し、全体の傾向を量的に分析、考察した。

結果から、「子どもの論理」をいかした国語教育実践の要件として以下の3点を提案するに至った。

- (1) 目標：意欲、技能、価値目標を連続したものとして意識すること、自分のもつ「子どもの論理」とは異なる論理の存在に気づき（技能目標）、受け入れ、多様性を感じる（価値目標）内容を設定すること
- (2) 方法：様々な意見の存在を知り、共通点と相違点に気づき、他者に受けとめられること、他者の意見を受けとめることを経験する過程を設定すること
- (3) 学習材：登場人物や物語内の出来事との児童の生活経験との間に適度な距離感が保たれること

5. 国語教育実践②の実際と検討 ―単元「朗読劇をつくろう！」の場合―

本章では、前章で述べた国語教育実践①の結果を踏まえ、REBTを援用して構築した小学校国語科授業をとりあげる。これも、論者が授業者として行った実践である。まず、実践授業の概要、結果について示し、児童のイラショナルビリーフの変容について分析する。続いて、目標、方法、学習材の視点から、「子どもの論理」をはたらかける実践について考察、検証する。

○調査

- ・対象校および学年：W小学校3年Y組（24名）、3年Z組（25名）
- ・時期：2017年11月8日（水）～28日（火）
- ・方法：ビデオカメラ、ICレコーダーによって収録した動画、音声
学習プリント、チェックシート、アンケート、リフレクションシートの記述

○単元名：朗読劇をつくろう！

○学習材名：「サーカスのライオン」川村たかし（『新しい国語 三下』東京書籍）

○単元目標

- ・場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。（技能目標）
- ・物語に興味を持ち、物語について解説しようとする事。（態度目標）
- ・文章を読んで考えたことを伝え合い、一人ひとりの感じ方に違いのあることに気づくこと。（価値目標）

○学習指導過程（全10時間）

第1次 物語にであい、大体的内容をとらえよう（1時間）

第2次 じんざや少年について考えよう（5時間）

第3次 朗読劇をつくろう（4時間）

実践②の事前、事後におこなったアンケート結果をもとに、質的な分析について示した。ここでは、行動観察の結果から4名の児童を抽出し、アンケートの選択結果と記述とを関連づけながら、「子どもの論理」がうかがえる点について分析、考察した。これらの結果に、リフレクションシートの記述、授業にかかわる行動観察を加え、児童1～4それぞれのもつ「子どもの論理」について考察した。

さらに、実践②の事前、事後におこなったチェックシートの回答結果をもとに、児童1～4それぞれのもつ、読む力と「子どもの論理」についての質的な分析について示した。

実践②では、「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと」を技能目標に設定した。これは、自分のもつ「子どもの論理」とは異なる論理の存在に気づくことを意図したものである。そして、児童が、「子どもの論理」をみつける、ひきだす、はたらきかけることを目指した。

また、「文章を読んで考えたことを伝え合い、一人ひとりの感じ方に違いのあることに気づくこと」を価値目標に設定した。これは、自分と異なる論理を受け入れ、多様性を感じることを意図したものである。

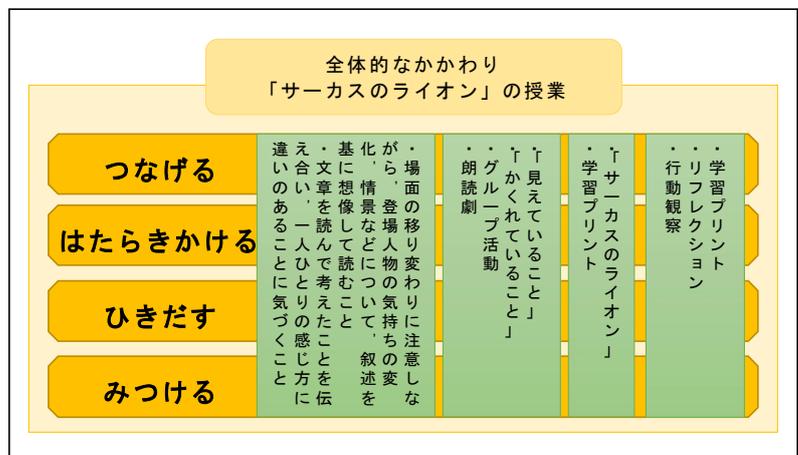


図3 「サーカスのライオン」授業モデル

そして、児童が「子どもの論理」にはたらきかけること、つなげることを目指した。

このように、技能目標と価値目標を連続したものと捉えて設定し、意図的に学習活動や指導方法を構成することによって、技能目標である「叙述を基に想像して読むこと」の達成に向けた、文学的文章を読むことの過程で、児童が「一人ひとりの感じ方に違いのあることに気づく」ことができるという実践理論のもと、おこなった授業について、図のように整理した（図3）。

こういった、目標設定のもとにおこなった実践②の結果、児童のイラショナルビリーフが軽減し、「子どもの論理」が変容した。特に、児童の言動や行動から読みとれることの多いイラショナルビリーフである、【受容欲求】、【失敗恐怖】の軽減、出来事の受けとめ方に変容がみられた。それとともに、情報の取り出しや推論について技能の向上がみられた。これは、「子どもの論理」と国語科で求められる力が相互にかかわっていることによるものであると考えられる。また、「子どもの論理」にはたらきかけることによって、正確に読むことや豊かに想像することができるようになる可能性を示している。

実践②をおこなう過程で、児童がさまざまな論理とかわりながら学習していることが観察された。自分のもつ「子どもの論理」、友だちのもつ「子どもの論理」、登場人物の論理、教科の論理、教師の論理の5つである（図4）。

児童は、他の論理についても、グループでの話し合い、一斉学習での教師との対話、作品との対話、自己内対話、紙上での対話等、様々な場面でかかわることができた。それぞれにかかわった論理、かかわった段階は異なる。ここに、授業で「子どもの論理」をいかした教育実践をおこなうことの意味があると推測された。

実践②を通して、様々な論理があり、論理への様々なかかわり方に触れ、自分のもつ「子どもの論理」やかかわり方について、作用し合い、高め合う場が授業だと確認された。

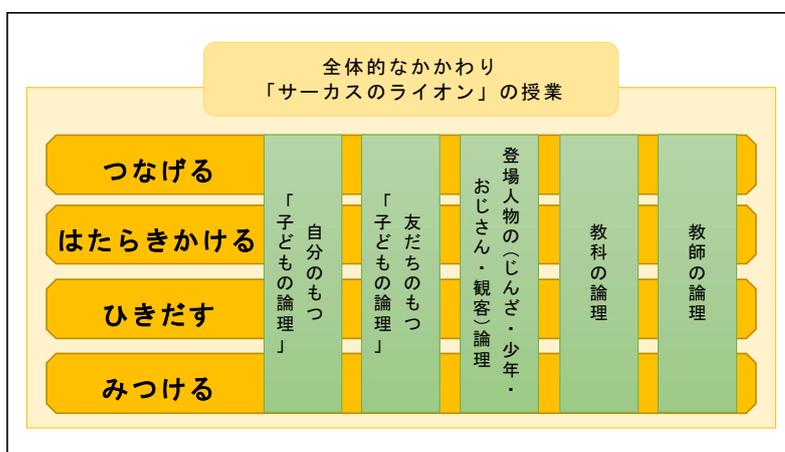


図4 「サーカスのライオン」かかわる論理

6. 「子どもの論理」の連続性を見据えたカリキュラム開発 —幼保小連携の視点から—

本章では、「子どもの論理」をいかした教育実践を補完するものとして、幼児教育に着目する。そのために、幼保小連携に関わる先行研究において提起される課題について整理する。そして、それを解消する一方策として「子どもの論理」研究の重要性を示す。また、幼保小連携の視点から、保育内容「ことば」、国語科教育の保育・学習指導計画を提案する。

先行研究の分析結果から、幼保小連携については、その重要性が広く認識されているが、取り組みが十分おこなわれてはいないことが明らかになった。そういった状況についての課題が指摘され、乗り越えようとする研究が進められている。それでもなお、次々と生じる多様な課題によって、幼保小連携は十分な成果を挙げられず、幼保小接続における問題事例が後を絶たない。課題とその要因が多様で複合的であるため、乗り越えが困難になっているのである。一つの提案で、すべての要因を払拭し、課題を解消することはできないからである。そのため、それぞれの課題とその要因に応じて選択可能なプランとして、研究成果である提案を活用することが有効であると考えられる。

そこで、本研究では、先行研究における提案に加え、「子どもの論理」をいかした教育実践を提案したい。「子どもの論理」に着目するということの起点は、子ども一人ひとりの言動や行動に他ならない。子どもの言動や行動といった、見えていることを表面的に捉えて判断するのではなく、様々な情報を総合し、隠れている「子どもの論理」までも捉えることが重要なのである。

保育者においても、教育者においても、子どもの言動や行動を起点にし、「他者の論理」である自分の論理を脇に置いて、「子どもの論理」を推測することが、子どもに寄り添った対応を可能にし、子どもの抱える課題の解決に繋がるのである。

小学校には、児童理解や生徒指導と教科指導が分断される傾向があり、それぞれの場面での教育実践を工夫するだけでは、子どもの抱える課題の根本的な解決に至らなかった。そこで「子どもの論理」に目を向けることによって、あらゆる場面における子どもの言動や行動その他の情報をもとに多面的に分析し、総合的に考察することに、課題の根本的な解決の糸口を見いだそうとした。つまり、幼児教育において重要視されてきた「子ども主体」や「領域」といった考え方に相通するものである。

こういった点から、「子どもの論理」をいかした教育実践を、幼保小の教育における共通の軸とすることによって、幼保小のスムーズな接続に繋がる幼保小連携を展望することができると考える。「子どもの論理」をいかした教育実践を組み込むことによって、特別な行事や教育課程編成を必要としないこと、日常の子どものみとりやかかわり方に、「子どもの論理」という観点を加えることによって継続性が保たれることによって、課題のいくつかは解消される。

また、幼保小接続期には、一人ひとりの子どもにとって、保育者や教育者が交代することによって進級に比べて大きな段差が生じる。保育者や教育者が、「子どもの論理」という共通の観点をもってかかわることによって、子ども理解や保育・教育の一貫性が保たれる。その結果として、一方が他方に従属する関係性に陥ることなく、幼保小の円滑な接続が望める。

以上の理由から、「子どもの論理」をいかした保育・教育実践を、幼保小連携の一つのプランとして、また、幼児教育、学校教育を貫く重要な観点として提案した。

さらに、幼保小連携の視点から「子どもの論理」をいかした教育実践を見つめることを目的として、幼保小接続における課題を見いだすことを意図し、小1プロブレムの事例について、「子どもの論理」分析、考察を行い、保育・教育実践の提案を試みた。

その結果、根本的な解決を目指すためには、「子どもの論理」に着目して、子どもの抱える課題の要因やかかわり方について検討することが有効であることが示唆された。

「子どもの論理」という視点から構想する実践については、子ども理解と子どものセルフヘルプという側面がある。この二つの側面は、互いに連関するものである。

子どもの表出する言動や行動から、言外にある「子どもの論理」を読みとろうと推論することは、保育者や教育者にとっては子ども理解である。一方、子どもが内在させる「子どもの論理」を客観視したり他者の論理とかかわったりするなかで言外の意味を読みとろうと推論することや齟齬を来した場合に「子どもの論理」が変容することは、子どもにとってセルフヘルプに繋がる力となる。

そして、保育者や教育者が「子どもの論理」という視点をもって子どもを理解し、実践をくり返しおこなうことによって、子どもは自分の内在させる「子どもの論理」をみつけ、ひき出し、はたらきかけ、つなげることができるようになる。さらに、「子どもの論理」の変容に保育者や教育者が気づき、はたらきかける。こうして、両側面は連関しながら螺旋状に影響し合い、変容していくものであると捉えられる。

こういった、「子どもの論理」をいかすという視点を保育・教育における共通の軸とすることによって、幼保小のスムーズな接続に繋がる幼保小連携を展望することができると考える。

終章

1. 本研究の成果

研究の成果については、以下の4点が挙げられる。

- ①「子どもの論理」研究について、学術的に位置づけることができた。
- ②教育現場において児童が表出する「子どもの論理」の調査をおこない、その実態を明らかにしたうえで、「子どもの論理」について定義し、適切なかわりについて、考え方や方法を提案することができた。
- ③「子どもの論理」をいかした国語教育実践について実践・検証し、成果と課題を明らかにすることができた。
- ④幼保小接続期に必要な要素を抽出し、「子どもの論理」をいかした保育・教育実践について提案し、展望することができた。

①については、国語科および他教科の教科教育研究やREBTに関する先行研究や先行実践から得た知見と、小学校における実態調査の結果に基づき、「子どもの論理」について定義をした。また、「子どもの論理」を対象とした研究について、国語科教育研究における学習者研究の領域に位置づけた。

②については、小学校において児童の日記の記述と言動や行動について調査を行い、REBTにおけるABC理論およびビリーフの捉え方に基づいた分析をすることによって、教育現場で展開される「子どもの論理」の実態や、複数共存する、複雑に関連する、重層的であるといった可能性を示した。さらに、「子どもの論理」の実態をもとに、様々な事例への適切な対応を検討した。そのうえで、国語科授業を含むあらゆる学校生活における「子どもの論理」について、多面的に捉えること、REBTを援用して分析して適切にかかわることの必要性を述べた。特に、国語科授業については文学体験の「参加・同化・対象化・典型化」をもとに、「子どもの論理」をいかした実践理論を構築した。

③については、②で得た実践理論をもとに、小学校において2つの国語科授業を実践した結果を、「子どもの論理」の変容について分析、考察した。その結果から、「子どもの論理」をいかした国語科授業による、イラショナルビリーフの軽減や論理力の向上についての可能性が示された。

④については、小1プロブレムの事例について、「子どもの論理」分析、考察をおこない、保育・教育実践の提案を試みた結果、幼保小接続期に「子どもの論理」をいかすという観点を保育・教育における共通の軸とすることによって、幼保小のスムーズな接続に繋がる幼保小連携を展望することができた。

2. 本研究の課題

研究の課題については、以下の3点が挙げられる。

- ①多面的な観察に基づくデータを用いた、「子どもの論理」についてのより詳細な分析
- ②「子どもの論理」をいかした教育実践理論の精緻化とさらなる実践
- ③乳幼児期の言語獲得を対象とした「子どもの論理」をいかした保育実践についての提案

①について、本研究における実践の結果分析では、「子どもの論理」にかかわる量的分析を中心に行った。そのため、個々の児童の変容や、その様相について十分に捉えきれているとはいえない。「子どもの論理」は、一人ひとりの児童に内在するものであるため、質的分析を行い、個別の変容や様相についても明らかにすべきであると考えられる。

②について、本研究ではREBTを援用し、各教科教育研究の知見をもとに、教育実践理論を構築した。それに基づく実践で得られた成果は、イラショナルビリーフの軽減にとどまった。本研究の最終的な目標は、児童がセルフヘルプをできるようになることである。そのためには「子どもの論理」をみつける、ひき出す、はたらかせることだけでなく、つなげることを促し、より児童の「子どもの論理」をいかせるような実践理論が

必要である。また、「子どもの論理」と発達段階との関係を明らかにするために、小学3年生だけでなく他学年での実践を行いたい。

③について、調査および実践の対象としたのは、小学校児童がもつ「子どもの論理」のみであった。発達という視点からみると、小学校児童期以前の実態についても明らかにすることが必要である。児童に比べて「子どもの論理」が未形成であると考えられる乳幼児を対象とした、「子どもの論理」をいかした保育実践の提案が望まれる。

3. 今後の展望

今後の展望については、次のように考える。

本研究で提案した「子どもの論理」をいかした教育実践の在り方は、日々の生活の中で悩み、苦しむ子どもの抱える課題の根本的な解決、真の論理力育成、さらに、子どもの将来的なセルフヘルプに繋がるものである。これはすなわち、保育・教育現場における、生活面および学習面の今日的な課題の解決に寄与することを意味する。

国語教育実践理論については、「子どもの論理」をいかすための、基本的な枠組みであり、他教科教育においても実践可能なものである。今後の学習者研究、保育・教育現場での実践をもとに、ブラッシュアップすることによって、より汎用性の高いものになると考えている。

未来を担う子どもたちには、思考力が求められる。この思考にはたらきかけようとする試みについては、各教科授業を含む学校生活全体で実践および検証する必要がある。その一つの方策として、「子どもの論理」をいかすという視点にたつて理論を構築し、実践に役立てることが、保育・教育研究において有効性をもつと考える。今後、子ども一人ひとりに目を向け、それぞれのもつ背景をも含み込んだ、子ども理解を起点とした保育・教育研究を進めていくことが必要である。

VI. 参考文献

- 足立幸男 (1984) 『議論の論理』 木鐸社
- 荒井城太郎 (2010) 「スクールカウンセリングにいかす REBT」, 菅沼憲治編『現代のエスプリ 518 REBT カウンセリング』 ぎょうせい pp.121-129
- 飯島敏文(1995)「社会科学習における“基礎・基本”の意義とそのはたらきに関する考察—小学校第4学年社会科授業単元『橿原バイパスと京奈和自動車道』の分析を通して—」, 『大阪教育大学紀要 44(1)』, 大阪教育大学, pp.61-76
- 五十嵐裕和,田中康善,藤田留三丸,菅野宣之,北野日出男 (1995)「個のよさが生きる理科学習 (その5):構成主義的学習観からのアプローチ」, 『日本理科教育学会全国大会要項 45』, 日本理科教育学会, p.189
- 石隈利紀 (1989)「論理療法の哲学・理論・技法」, 日本学生相談学会『論理療法にまなぶ—アルバート・エリスとともに』 川島書店
- 市位和生(2007)「子どもの素朴概念を科学化・相対化する社会科授業—小学校第6学年の単元「武士とは何か」の開発を手がかりに—」, 『社会科研究 66』, pp.31-40
- 市毛勝雄 (2003) 浜松市立広沢小学校『論理的思考力を育てる授業』 明治図書
- 井上尚美 (1975) 『言語論理教育入門—国語科における思考—』 明治図書
- 井上尚美 (1988) 『思考力を伸ばす読みの指導』 学芸図書
- 井上尚美 (2005) 『国語教師の力量を高める—発問・評価・文章分析の基礎』 明治図書
- 井上尚美 (2007) 『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理— (増補新版)』 明治図書
- 井上尚美・尾木和英・河野庸介・安芸高田市立向原小学校 (2008) 『思考力を育てる「論理科」の試み』 明治図書

- 井原正美 (1996) 「子どもの論理と科学の論理を結ぶ理科の授業:植物の体のつくりを通して」, 『日本理科教育学会全国大会要項 46』, 日本理科教育学会, p.207
- 今村義正・國分康孝 (1989) 『論理療法にまなぶ』 日本学生相談学会, 川島書店
- 井村真士・畦浩二 (2011) 「「電気」についての児童の素朴概念の変容に関する研究:小学校第 4 学年の実践事例を通して」, 『日本理科教育学会近畿支部大会(大阪大会)発表要旨集』, 日本理科教育学会, p.71
- 岩立志津夫・小椋たみ子編 (2017) 『よくわかる言語発達 [改訂版]』, ミネルヴァ書房
- 上嶋玲子 (2006) 「子どもの論理」をひろげる授業づくり:第 3 学年「ラケットベースボール」の実践を通して(体育科研究部), 『東京学芸大学教育学部附属小金井小学校研究紀要 28』, 東京学芸大学附属小金井小学校 pp.191-196
- 上田寛二・堀哲夫 (2003) 「学習内容の理解に関する評価方法の研究:小学校理科「てこ」, 「ものの運動」を事例にして」, 『日本理科教育学会関東支部大会研究発表要旨集 42』, 日本理科教育学会, p.49
- 宇佐美寛 (1987) 『思考指導の論理』 明治図書
- 宇佐美寛 (1989) 『新版 論理的思考—論説文の読み書きにおいて—』 メヂカルフレンド社
- 宇佐美寛 (1993) 『「議論の力」をどう鍛えるか』 明治図書
- 白井博 (2012) 「小学校から中学校への学校間移行の学校適応と学習動機に対する影響 (1) —研究の目的と全体計画—」, 『札幌学院大学人文学会紀要 (92)』, 札幌学院大学総合研究所, pp.25-39
- 畦浩二・井村真士(2012) 「「電気」についての児童の素朴概念の変容に関する研究—小学校第 4 学年「電気のはたらき」の単元事例を通して—」, 『教科教育学論集 11』, pp.71-78
- 江原勝久 (2010) 「子どもの REBT」, 『REBT カウンセリング—感情の問題解決』を指向して』, 至文堂, pp.111-120
- 太田誠 (2013) 「子どもの問いが算数授業の本質の理解を進展させる様相に関する研究」, 『日本数学教育学会誌 数学教育学論究 95』, 日本数学教育学会, pp.41-48
- 大鷹宏彰・三崎隆・天谷健一 (2011) 「事象をもとに友とやりとりしながら,科学的な見方や考え方を高める理科学習に関する実践研究」, 『教育実践研究:信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 12』, 信州大学教育学部附属教育実践総合センター, pp.71-80
- 岡崎正和 (1997) 「子どもの理解に基づく学習材構成に関する研究(1):四角形の相互関係の共通概念経路を中心として」, 『数学教育論文発表会論文集 30』, 日本数学教育学会, pp.391-396
- 岡崎正和(1999) 「算数から数学への移行期における子どもの論理の発達の特徴—除法の一般化を事例として—」, 『上越数学教育研究 14』, 上越教育大学数学教室, pp.39-48
- 岡田康之・鈴木智恵子 (1995) 「子どもたちの素朴概念と科学概念の獲得」, 『日本理科教育学会全国大会要項 45』, 日本理科教育学会, p.91
- 岡田康之・鈴木智恵子・鳥本昇 (1996) 「子どもたちの素朴概念と科学概念の獲得 III」, 『日本理科教育学会全国大会要項 46』, 日本理科教育学会, p.197
- 岡田康之 (1998) 「子供たちの素朴概念と科学概念の獲得」『初等教育資料 682』, 東洋館出版社, pp.93-99
- 岡正人 (2002) 「5 年:児童の素朴概念を活用した理科授業」, 『理科の教育 51(4)』, 日本理科教育学会 pp.28-30
- 岡本夏木 (1982) 『子どもとことば』 岩波書店
- 岡本夏木 (1985) 『ことばと発達』 岩波書店
- 小川哲男・森本信也 (2005) 「生活科における子どもの自然事象に関わる「知的な気付き」の構造に関する研究:第二学年 単元「ザリガニをとりにいこう」を事例として」, 『理科教育学研究 45(3)』, 日本理科教育学会, pp.11-21
- 荻原朋子・岡出美則・鬼澤陽子 (2007) 「体育授業における素朴概念の理論的検証」, 『日本体育学会大会予稿集 58』, 日本体育学会, p.327

- 荻原朋子・岡出美則・須甲理生,四方田健二 (2013)「小学校高学年児童におけるオーバーハンドパスに関する素朴概念調査方法の検討:中学生との比較から」,『日本体育学会大会予稿集 64』, 日本体育学会, p.346
- 奥澤雅恵・下田芳幸・石津憲一郎 (2011)「高等学校におけるストレスマネジメント教育の試みー「論理療法」を取り入れた健康教育と「保健体育科」の授業実践よりー」,『教育実践研究』富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター, pp.91-103
- 小田純子・吉田淳 (2012)「学習指導要領改訂に伴う物質概念(粒子概念)形成の推移に関する研究」,『日本理科教育学会東海支部大会研究発表要旨集 58』, 日本理科教育学会, p.403
- 小野瀬倫也 (2009)「子どもの論理構築を志向した「地球と宇宙」の授業構想:小・中連携カリキュラムの視点から」,『研究紀要 47』, 東京学芸大学, pp.31-41
- 小原大祐・菊地洋一・加茂川恵司・村上祐 (2015)「「ものの温まり方」における児童の理解と可視化学習材の活用」,『日本理科教育学会全国大会要項 65』, 日本理科教育学会, p.323
- 小柳和喜雄 (2009)「幼小・小中連携教育および一貫教育等に関する調査研究」,『教育実践総合センター紀要 (18)』, 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター, pp.261-267
- 柿畑佳祐 (2012)「理科における児童の素朴概念と学習指導の実態:第 5 学年「ふりこのきまり」より」,『山形大学大学院教育実践研究科年報 3』, 山形大学大学院教育実践研究科, pp.230-233
- 柿畑佳祐 (2013)「小学校理科における力概念変容のための指導方法の研究:第 6 学年単元「てこのはたらき」より」,『山形大学大学院教育実践研究科年報 4』, 山形大学大学院教育実践研, pp.58-65
- 片山幸毅・戸北凱惟 (1998)「葛藤条件の提示が溶解時の質量保存概念の学習に及ぼす影響:児童の意識調査と学習効果の分析から」,『年会論文集 22』, 日本科学教育学会, pp.53-54
- 片山幸毅・戸北凱惟 (1998)「葛藤条件の提示による溶解時の質量保存概念の児童の意識変容と学習効果の研究」,『日本理科教育学会全国大会要項 48』, 日本理科教育学会, p.36
- 加藤重広 (2015)「構文推意の語用論的分析ー可能構文を中心にー」,『北海道大学文学研究科紀要 146』, 北海道大学文学研究科, pp.259-293
- 加藤尚裕 (1997)「小学校の理科授業における振り子の周期性の概念変換」,『日本理科教育学会全国大会要項 47』, 日本理科教育学会, p.72
- 加藤尚裕 (1999)「小学生の「振り子の等時性」概念の理解」,『日本理科教育学会全国大会要項 49』, 日本理科教育学会, p.65
- 加藤尚裕 (2000)「「振り子の特性」に関する概念形成の研究:自由試行を中心にして」,『理科教育学研究 40(3)』, 日本理科教育学会, pp.1-11
- 加藤尚裕・本澤智巳 (2006)「認知的活動と概念変化との関係に関する基礎的研究:小学校第 4 学年「空気のかさと温度」における実験場面の事例分析を中心として」,『九州女子大学紀要 人文・社会科学編 43(1)』, 九州女子大学・九州女子短期大学, pp.35-49
- 加藤尚裕 (2006)「実験活動における反証事例と「空気の膨張」に関する概念:小学校理科 4 年「空気のかさと温度」の学習を事例として」,『理科教育学研究 47(2)』, 日本理科教育学会, pp.75-82
- 加藤尚裕 (2007)「空気の膨張に関する「考えの対立」を取り入れた事例研究:小学校第 4 学年「空気とかさ」の事例を通して」,『日本教科教育学会誌 30(1)』, 日本教科教育学会, pp.19-28
- 加藤尚裕・下妻淳志 (2010)「小学生の振り子の特性に関する概念形成を促す素朴概念シートの開発:メタ認知的モニタリングの働きに着目して」,『日本理科教育学会全国大会要項 60』, 日本理科教育学会, p.185
- 加藤尚裕・下妻淳志 (2011)「小学生の振り子の特性に関する概念形成を促す素朴概念シートの開発:メタ認知的モニタリングの働きに着目して」『国際経営・文化研究 2』, 国際コミュニケーション学会, pp.49-57

- 金井英男・高野庸 (2001) 「力と運動に関する素朴概念とその改善の試み」, 『科学教育研究 25(4)』, 日本科学教育学会, pp.274-28
- 神谷大介 (2007) 「素朴概念を科学的概念へと高める理科学習:概念変容シートの活用を通して」, 『日本理科教育学会全国大会要項 57』, 日本理科教育学会, p.256
- 川井栄治・吉田寿夫・宮元博章・山中一英 (2006) 「セルフ・エスティームの低下を防ぐための授業の効果に関する研究—ネガティブな事象に対する自己否定的な認知への反駁の促進—」, 『教育心理学研究 54』, 日本教育心理学会, pp.112-123
- 河野順子・橋本須美子・楢山範夫・山元悦子・住田勝 (2007) 「入門期におけるコミュニケーション能力の育成に関する考察」, 『全国大学国語教育会発表要旨集 113』, pp.155-158
- 河野順子 (2015) 「学習者理解」, 『国語科重要用語事典』, 明治図書, p.37
- 川村教一・田口瑞穂 (2011) 「児童の河川砂成因認識への野外学習による影響の検討—河床および岩石露頭での学習例をもとに—」, 『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 33』, 秋田大学, pp.59-66
- 神林久美子・杉本良一 (2004) 「小学校理科「もののとけ方」に関する研究:粒子 or 分子概念を取り入れた学習についての考察」, 『日本理科教育学会中国支部大会研究発表要項 53』, 日本理科教育学会, p.24
- 城内優子・松森靖夫・堀哲夫 (1995) 「学習者が抱いている植物の成長要因に関する実証的研究」, 『日本理科教育学会全国大会要項 45』, 日本理科教育学会, p.153
- 吉川芳則 (2002) 『小学校説明的文章の学習指導過程をつくる』 明治図書
- 吉川芳則・大江平治 (2010) 『思考力, 表現力を育てる文学の授業—「読むこと」の言語活動開発に向けて—』 三省堂
- 木村和孝・杉本明子・村田光宏 (2013) 「小学生・中学生の「水溶液」に関する考え方について」, 『日本理科教育学会全国大会要項 63』, 日本理科教育学会, p.246
- 木村和孝・村田光宏 (2011) 「水溶液に対する子どもの表現について」, 『日本理科教育学会全国大会要項 61』, 日本理科教育学会, p.376
- 栗山和広・吉田甫・中島淑子 (2014) 「子どもの論理を反映した教授介入:割合の認知的障害に及ぼす効果」, 『日本教育心理学会総会発表論文集 56』, 日本教育心理学会, p.588
- 黒澤寿美 (2013) 「小一プロブレムの現状と今後の課題」, 『環太平洋大学短期大学部紀要 24』, 太平洋大学短期大学部, pp.1-5
- 言語力育成協力者会議 (2010) 「言語力の育成方策について」 文部科学省
- 源田智子・村井義明 (2005) 「溶解学習材における子どもの素朴概念と理解度調査」『研究論叢 芸術・体育・教育・心理 55(3)』, 山口大学, pp.31-45
- 幸坂健太郎 (2011) 「国語科教育における「論理」・「論理的思考」概念整理」, 『国語教育思想研究 第3号』, 国語教育思想研究会, pp.9-18
- 香西秀信 (2009) 「虚偽論より見た人間の思考上の癖について(レトリックの眼で見た世界—虚偽・悪文・映画・判決—)」, 『表現研究 90』, 表現学会, pp.16-20
- 光野公司郎 (2009) 『「活用・探究型授業」を支える論証能力』 明治図書
- 光野公司郎 (2010) 「小学校第1学年の「国語科」と幼稚園5歳児の領域「言葉」との連携指導の在り方—同一学習材「この音なあに」の指導計画作成を通して—」, 『東京未来大学研究紀要 第3号』, 東京未来大学, pp.67-76
- 古賀正・岩田勝英・進藤公夫 (1998) 「遷移ダイアグラム作成ソフトと概念地図作成ソフトの実際」, 『日本理科教育学会全国大会要項 48』, 日本理科教育学会, p.191
- 國分久子 (1999) 「イラショナルピラーフの特徴」, 『論理療法の理論と実際』, 誠信書房, pp.15-28
- 國分康孝 (1999) 「論理療法の意義と特質」, 『論理療法の理論と実際』, 誠信書房, pp.3-14

- 小西一博・稲垣応顕(2005)「ADHD 傾向を示す軽度知的障害児に関する事例研究—self-esteem の向上に着目して—」,
『富山大学教育実践総合センター紀要 6』, 富山大学教育実践総合センター, pp.137-142
- 小林史治・松森靖夫・堀哲夫(1996)「子どもの考えを生かした理科学習指導の構築を目指して(V):「人の体のつくり
や働き」に関する子どもの認識を中心に」, 『日本理科教育学会全国大会要項 46』, 日本理科教育学会, p.213
- 金銅弘枝・菅沼憲治(2010)「REBT の健康観」, 『現代のエスプリ 518 REBT カウンセリング』, 至文堂, pp.38-48
- 紺野高裕・吉野巖(2005)「教師課題提示型学習と問題解決型学習における素朴概念変容効果および学習過程の比較」,
『日本教育心理学会総会発表論文集 47』, 日本教育心理学会, p.491
- 櫻本明美(1995)『説明的表現の授業—考えて書く力を育てる—』明治図書
- 佐々木賢治(2006)「子どもの論理」をひろげる授業づくり:第4学年「跳び箱運動」を通して, 『東京学芸大学教育学
部附属小金井小学校研究紀要 28』, 東京学芸大学教育学部附属小金井小学校, pp.203-208
- 清水誠・石井都・海津恵子・島田直也(2005)「小グループで話し合い,考えを外化することが概念変化に及ぼす効果:お
湯の中から出る泡の正体の学習を事例に」, 『理科教育学研究 46(1)』, 日本理科教育学会, pp.53-60
- 清水誠・野辺茂樹・鮫島弘樹(2011)「小・中学校間の接続を踏まえた理科指導方法の研究」, 『年会論文集 35』, 日本
科学教育学会, pp.261-262
- 下条知淑「子どもの論理をひろげる理科学習指導:第3学年「豆電球に明かりをつけよう」を通して」, 『東京学芸大学
教育学部附属小金井小学校研究紀要 28』, 東京学芸大学, pp.109-114
- 神保真紀子(2010)『就学前教育と学校教育の学びをつなぐ 小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム』明治
図書
- 菅沼憲治編(2010)『REBT カウンセリング—「感情の問題解決」を指向して』, 至文堂
- 菅沼憲治・NPO 法人日本人生哲学感情心理学会編(2013)『人生哲学感情心理療法入門—アルバート・エリス博士の
REBT を学ぶ』, 静岡学術出版
- 杉本良一・松尾映子(2005)「子どもの生活に根ざした理科学習に関する研究:子どもの熱概念と物のあたためり方の学
習について」, 『地域学論集:鳥取大学地域学部紀要 1(3)』鳥取大学, pp.81-109
- 杉山雅俊・田中邦明(2010)「子どもの論理とその変容の理解を促す授業分析ツールの試作」, 『日本理科教育学会北海
道支部会報 21』, 日本理科教育学会, p.23
- 勝呂創太・葉山優・小嶋美也子・圓谷秀雄・金田知之・下條隆嗣(2006)「小学校理科における物質の粒子像導入の可
能性」, 『年会論文集 30』, 日本科学教育学会, pp.183-184
- 住田勝(2008)「読む力の構造とその発達—「ごんぎつね」の授業研究を手がかりとして—」『全国大学国語教育会発
表要旨集 115』, 全国大学国語教育学会, pp.129-132
- 瀬川榮志・小森茂・山口県小学校教育研究会国語部(1996)『説明文学習材の授業改善事例集』, 明治図書
- 菅沼美奈(2015)「素朴概念を踏まえた授業構想とその有効性:自らの授業力向上を目指して」, 『教育実践高度化専攻成
果報告書抄録集 静岡大学 5』 pp.55-60
- 善野八千子(2010)「幼小接続期におけるカリキュラムの開発」, 『奈良文化女子短期大学紀要 41』奈良文化女子短
期大学, pp.49-67
- 善野八千子(2015)「人間教育に資する「幼小接続期カリキュラム」のあり方—「とまどいマトリクス」を活用した接
続カリキュラムの改善—」, 『人間教育学研究 3』, 奈良学園大学, pp.39-49
- 高垣マユミ(1998)「三角形の高さに及ぼす素朴概念の影響」, 『日本教育心理学会総会発表論文集 40』, 日本教育心理
学会, p.247
- 高垣マユミ(1999)「台形概念学習における素朴概念に基づいた事例提示の教授効果」, 『学校教育学研究論集 2』, 東
京学芸大学, pp.13-20

- 高垣マユミ・田原裕登志(2004)「コンピュータ使用が理科協同学習の問題解決に及ぼす影響」,『鎌倉女子大学紀要 11』, 鎌倉女子大学, pp.39-48
- 高垣マユミ・田爪宏二・森本信也・加藤圭二(2010)「溶解概念の変化を促す認知的・社会的側面からの教授的アプローチ」,『日本教科教育学会誌 33(2)』, 日本教科教育学会, pp.1-10
- 高山真理子・永井秀樹・川北一彦(1997)「事例提示と児童の考え方の変化:生活経験と水の温度について」,『日本理科教育学会全国大会要項 47』, 日本理科教育学会, p.226
- 武井知子・堀哲夫(2006)「ヒトの「消化」・「吸収」に関する理解の研究」,『日本理科教育学会全国大会要項 56』, 日本理科教育学会, p.190
- 竹澤秀之・伊佐公男(1999)「素朴概念を生かした科学概念の形成--小学校5年「水溶液」の学習を通じて」,『福井大学教育実践研究 24』, 福井大学教育学部附属教育実践研究指導センター, pp.231-237
- 竹澤秀之・伊佐公男・金本訓郎・橋本将宏・諏訪裕子・木下慶之(1999)「素朴概念を生かした科学概念の形成:小学校5年「水溶液」の学習を通して」,『日本理科教育学会全国大会要項 49』, 日本理科教育学会, p.172
- 竹部祐真・松田輝・村上忠幸・中野英之(2012)「ものを燃やす実験から見えてくる素朴概念の姿:小学校6年生「生物とその環境」の導入授業において」,『理科教育学会全国大会要項 62』, 日本理科教育学会, p.428
- 立川泰史・齊藤和貴・片山守道・小倉勝登・佐々木賢治・下条知淑・白間雅裕・長島寛和・前田良子(2007)「実感と創造のある学びを育む(2年次):「子どもの論理」をひろげる授業」,『東京学芸大学教育学部附属小金井小学校研究紀要 29』, 東京学芸大学, pp.2-11
- 田中翔一郎・畦浩二(2013)「植物の生命の連続性における児童の概念形成について—植物の発芽の学習分析にもとづいて—」,『大阪教育大学紀要 62(1)』, 大阪教育大学, pp.43-52
- 谷原一弥(2012)「理科における児童の概念変換を目指した授業の考え方:第6学年「てこのはたらき」を題材として」,『山形大学大学院教育実践研究科年報 3』, 山形大学大学院教育実践研究科, pp.262-265
- 谷原一弥(2013)「小学校理科における他者との関わりを重視した授業の実践:社会構成主義の視点からの分析」,『山形大学大学院教育実践研究科年報 4』, 山形大学大学院教育実践研究科, pp.114-121
- 佃恭大(2008)「中学生の学校生活への適応感を高める研究—論理療法の考え方を活用したプログラム開発・実施を通して—」,『青森県総合学校教育センター研究紀要 2007』, 青森総合学校教育センター, No.22
- 土井正人・荒木紀幸(2004)「素朴概念を手がかりとしたコミットメント活用による科学的な知の構築に関する研究—小学校第5学年「物の運動(ふりこ)」を通して」,『兵庫教育大学教科教育学会紀要 17』, 兵庫教育大学教科教育学会事務局, pp.23-32
- 東井義雄(1972)『東井義雄著作集 2』, 明治図書
- 徳森友希男(1996)「子どもの論理と科学の論理を結ぶ理科の授業(2):その3 小学校6年「水溶液」の展開を中心に」,『日本理科教育学会全国大会要項 46』, 日本理科教育学会, p.203
- 鳥越ゆい子(2016)「幼保小接続期における教育課程の検討—次期学習指導要領の「育成すべき資質能力」をふまえて—」,『帝京科学大学教職指導究 1(1)』, 帝京科学大学教職センター, pp.193-197
- 永井秀樹・川北一彦(1996)「児童の電流概念形成と実験・観察」,『日本科学教育学会研究会研究報告 11(1)』, 日本科学教育学会, pp.57-62
- 永井秀樹・川北一彦(1996)「素朴概念からの概念転換と実験・観察 1:電気の流れについて」,『日本理科教育学会全国大会要項 46』, 日本理科教育学会, p.329
- 長井るり子作・小倉正巳絵『小さなりゅうとふしぎな木』国土社
- 長崎伸二・山口国語授業研究会(2008)『論理力をはぐくむ国語の授業』三省堂

- 仲島恵美・吉野巖 (2006) 「素朴概念の修正におけるメタ認知的支援の有効性:メタ認知的支援による素朴概念の背景の意識化によって素朴概念は修正されるか」, 『日本教育心理学会総会発表論文集 48』, 日本教育心理学会, p.243
- 仲島恵美・吉野巖 (2007) 「素朴概念の修正におけるメタ認知的支援の有効性(2):素朴概念の背景の意識化と学習内容の記述内容の分析を通して」, 『日本教育心理学会総会発表論文集 49』, 日本教育心理学会, p.53
- 中島淑子 (2010) 「小学校低学年算数「長さ」における操作活動と概念の拡張」, 『教育方法学研究:日本教育方法学会紀要 35』, 日本教育方法学会, pp.13-23
- 中島稔・戸北凱惟 (1997) 「類似する課題提示による類推を促す指導法に関する研究:溶解時の重さの保存認識について」, 『年会論文集 21』, 日本科学教育学会, pp.289-290
- 中田晋介・柴一実,山崎敬人 (2011) 「小学校理科における学び文化の創造(12)「血液のはたらき」の理解を促す学習材の開発」, 『学部・附属学校共同研究紀要 40』, 広島大学学部・附属学校共同研究機構, pp.273-278
- 中坪史典・香曾我部琢・後藤範子・上田敏丈 (2011) 「幼児理解から出発する保育実践の意義と課題—幼児理解・保育計画(デザイン)・実践・省察の循環モデルの提案—」, 『子ども社会研究 (17)』, 日本子ども社会学会, pp.83-94
- 中野正俊 (2010) 「児童の科学的概念を討論で深める問題解決学習:第4学年理科「水の変身:わき立つ大きな泡の正体をさぐれ」から」, 『日本理科教育学会全国大会要項 60』, 日本理科教育学会, p.144
- 中村仁志・太田友子・丹佳子・福田奈未 (2016) 「「中1ギャップ」における問題と背景—小学校から中学校への接続における生徒の困り感について—」, 『山口県立大学学術情報 9』, 山口県立大学, pp.87-92
- 中村美智生・荒木紀幸 (1999) 「素朴概念に着目した授業研究—「ものの動きとはたらき」の単元を通して」, 『日本学習材学会年報 10』, 日本学習材学会, pp.83-85
- 中村美知生・荒木紀幸 「「ものの動きとはたらき」に関する小学生から大学生に至る素朴概念の比較」兵庫教育大学教科教育学会紀要 12 pp.22-27
- 中山迅 (2005) 「理科学習における素朴概念の把握と概念変化の支援:カウンセリングマインドで問題の共有を図りながら進める学習指導」, 『理科の教育 54(9)』, pp.594-596
- 名倉一美・緩利誠 (2011) 「幼児教育からみた幼稚園・保育所・小学校連携の経緯と実際—連携推進の根拠と期待される成果に注目して—」, 『浜松学院大学研究論集 (8)』, 浜松学院大学, pp.109-123
- 難波博孝・三原市立木原小学校 (2006) 『楽しく論理力がつく国語科授業づくり』 明治図書
- 難波博孝・三原市立三原小学校 (2007) 『文学体験と対話による国語科授業づくり』 明治図書
- 難波博孝 (2008) 『母語教育という思想—国語科解体/再構築に向けて』 世界思想社
- 難波博孝 (2009) 「国語教育とメタ認知」/丸野俊一編『現代のエスプリ No.497』 至文堂
- 難波博孝 (2015) 「思想研究としての国語教育授業研究:打ち続く困難の中で」『全国大学国語教育会発表要旨集 128』, pp.185-186
- 西野陽子・堀哲夫・松森靖夫 (1995) 「水の状態変化に関する子どもの素朴概念について」, 『日本理科教育学会全国大会要項 45』, 日本理科教育学会, p.220
- 西村一洋・鳥本昇 (1996) 「理科における素朴概念の調査とそれらを修正するための学習材開発・実践・評価」, 『日本理科教育学会全国大会要項 46』, 日本理科教育学会, p.267
- 西村眞 (2012) 「子どもと算数的活動—授業における学びの質の考察—」, 『子ども未来学研究 7』, pp.11-17
- 日本学生相談会編(1989) 今村義正・國分康孝責任編集『論理療法にまなぶ』 川島書店
- 日本人生哲学感情心理学会 (2010) 『REBT 研究 1』 文教大学出版事業部
- 日本人生哲学感情心理学会 (2011) 『REBT 研究 2-1』 文教大学出版事業部
- 日本人生哲学感情心理学会 (2013) 『REBT 研究 3-1』 文教大学出版事業部

- 野々村雅美 (1996) 「子どもの論理と科学の論理を結ぶ理科の授業(2):その8「こん虫のからだ」を中心に」、『日本理科教育学会全国大会要項 46』, 日本理科教育学会, p.208
- 林巨樹 (2010) 「子どもができるセルフヘルプ朝の短い時間を活用した REBT (論理療法) ー」, 『大学院派遣研修研修結果報告書』, 東京都教職員研修センター
- 林康成・三崎隆 (2014) 「概念地図・トレーシングペーパーを利用し,学習後の素朴概念・知識の変容をメタ認知する指導のあり方」, 『日本理科教育学会北陸支部大会発表要旨集 2014』, 日本理科教育学会, p.46
- 葉山優・小嶋美也子・勝呂創太・圓谷秀雄・金田知之・下條嗣 (2006) 「小学校理科への物質の粒子像導入の可能性:児童のもつ粒子像についての調査」, 『東京学芸大学紀要 58』, 東京学芸大学, pp.15-39
- 原田大介 (2009) 「国語教育における新たな学習者研究の構築-個へのまなざしの必要性-」 『国語科教育 65』, pp.11-18
- 春木憂 (2015a) 「「その子なりの論理」をいかした小学校国語教育実践を目指して(1)-学校における論理療法を援用した実践-」, 『国語教育思想研究(11)』, pp.33-44
- 春木憂 (2015b) 「小学校における「その子なりの論理」についての一考察-論理療法における irrational belief による分析-」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要 64』 広島大学大学院教育学研究科, pp.67-76
- 春木憂 (2016) 「「その子なりの論理」をいかした児童理解の方法の開発-論理療法療法を援用した分析-」 『広島大学大学院教育学研究科紀要 65』, 広島大学大学院教育学研究科, pp.93-102
- 春木憂 (2017a) 「「その子なりの論理」をいかした教育の開発に向けて-論理療法療法を援用して-」 『初等教育カリキュラム研究 (5)』, 初等教育カリキュラム学会, pp.57-67
- 春木憂 (2017b) 『小学校国語科における説明的文章の授業開発とその評価-論理的に読み, 考え, 伝え合う学習指導過程を通して-』, 溪水社
- 春木憂 (2017c) 「子どもの論理」を活かした教育実践を目指して-幼保小連携の視点から-」, 『国語教育思想研究』, 国語教育思想研究会, pp.25-34
- 春木憂 (2017d) 「保育・教育における「子どもの論理」を活かした実践の在り方について」, 『国語教育思想研究』, 国語教育思想研究会, pp.35-44
- 樋口俊久・木村捨雄 (1996) 「創造性伸長の視点にたつ生活科の授業設計と評価に関する研究:第 2 学年生活科単元「風と遊ぼう」の開発・実践を通して」, 『日本科学教育学会研究会研究報告 3』, 日本科学教育学会, pp.63-68
- 兵庫教育大学 (株) ベネッセコーポレーション共同研究プロジェクト推進室 (2010) 『活用型学習の指導方法及び評価方法の研究』, みつ印刷
- 平田昭雄・杉山健太郎・高根沢伸友 (1997) 「児童の日常生活環境と昆虫に関する素朴概念」, 『年会論文集 21』, 日本科学教育学会, pp.243-244
- 福崎淳子・高梨圭子 (2010) 「幼稚園における幼児の言葉の育ちを小学校教育へとつなげるための課題-なめらかな接続をめざして-」, 『東京未来大学研究紀要 3』, 東京未来大学, pp.57-65
- 福田章人 (1998) 「動的自然観に立った理科指導法への一提案:小学校第 5 学年「ものの運動:振り子」の実践を通して」, 『年会論文集 22』, 日本科学教育学会, pp.149-150
- 藤森裕治 (2010) 「予測不可能事象に焦点を当てた事例研究-国語科授業における教師の実践的知識の考察-」, 『信州大学教育学部研究論集(3)』, 信州大学教育学部, pp.9-22
- 藤森裕治 (2013) 「国語科授業研究・学習者研究の動向」, 『国語科教育研究の成果と展望 II』, 全国大学国語教育学会, pp.521-528
- 古瀬健太郎 (2012) 「小学校段階における磁石の学習指導に関する研究(2)」, 『日本理科教育学会全国大会要項 62』, 日本理科教育学, p.240

- 古屋澄人 (2009) 「新発見! 電気の働き:3年生までの電気の働きに対する素朴概念から科学的な見方・考え方の再構築を目指して」, 『理科の教育 58(9)』, 日本理科教育学会, pp.666-669
- 星川琢見 (2016) 「理科における素朴概念の修正方法の研究:電磁石領域において」, 『山形大学大学院教育実践研究科年報 7』, 山形大学大学院教育実践研究科, pp.268-271
- 堀井孝彦・藤田留三丸・青木良太・河野広和・大熊雅士・五十嵐敏文 (2015) 「豊かな知の構築を目指した理科学習(その 15)」, 『日本理科教育学会関東支部大会研究発表要旨集 54』, 日本理科教育学会, p.102
- 堀井孝彦 (2015) 「物理教育研究に基づいた小学校理科授業の改善(その 5):生活科における物理学習をどうするか?」, 『日本理科教育学会関東支部大会研究発表要旨集 54』, 日本理科教育学会, p.92
- 堀井孝彦 (2015) 「物理教育研究に基づいた小学校理科授業の改善(その 4):生活科における物理学習をどうするか?」『物理教育学会年会物理教育研究大会予稿集 32』, 日本物理教育学会, pp.73-74
- 堀井孝彦・藤田留三丸・青木良太・河野広和・大熊雅士・五十嵐敏文 (2015) 「豊かな知の構築を目指した理科学習(その 12)」, 『日本理科教育学会全国大会要項 65』, 日本理科教育学会, p.346
- 堀井孝彦・藤田留三丸・青木良太・河野広和・大熊雅士・五十嵐敏文 (2014) 「豊かな知の構築を目指した理科学習(その 9)」, 『日本理科教育学会関東支部大会研究発表要旨集 53』, 日本理科教育学会, p.19
- 堀江祐爾 (2007) 『国語科授業再生のための5つのポイント』 明治図書
- 堀圭二・宮田仁 (2001) 「科学的概念の形成を目指した Web 学習材開発(1)」, 『年会論文集 17』, 日本教育情報学会, pp.122-123
- 堀哲夫 (1998) 「国際理科教育調査から見た我が国の理科教育:その成果と課題 (5)国際理科教育調査研究の課題:最近の素朴概念研究をふまえて」, 『日本理科教育学会全国大会要項 48』, 日本理科教育学会, pp.272-273
- 牧佳彦 (1998) 「動的自然観に立った理科指導法への一提案:小学校第 5 学年「植物の発芽と成長」の実践を通して」, 『年会論文集 22』, 日本科学教育学会, pp.153-154
- 間瀬茂夫・難波博孝・長崎伸二・河野順子・植山俊宏 (2002) 「説明的文章の読みの発達の検討-小学校高学年から中学校にかけての変化を中心に-」, 『国語科教育 51』, 全国大学国語教育学会, pp.26-33
- 松本伸示・疋田直子 (1998) 「「水溶液の性質」における感覚的理解と知的理解の統合」, 『日本理科教育学会全国大会要項 48』, 日本理科教育学会, p.35
- 松森靖夫・奥村勉・堀哲夫 (1998) 「人の発生概念に関する授業設計とその試行-授業前の子どもが抱く素朴概念に基づいて-」, 『日本理科教育学会研究紀要 37(2)』, 日本理科教育学会, pp.1-14
- 三上良太・平山訓之・稲波悠季・菅原身奈・久坂哲也・八木一正 (2005) 「遊園地を活用した科学体験学習の開発(II):メタ認知能力の向上と素朴概念の修正の側面から」, 『日本理科教育学会東北支部大会講演要旨集 44』, 日本理科教育学会, p.16
- 三木直輝・臼井博 (2007) 「素朴概念の自律的修正が与える学習への影響」, 『日本教育心理学会総会発表論文集 49』, 日本教育心理学会, p.262
- 三木直輝・臼井博 (2008) 「理科の授業における素朴概念修正過程での発話の質的变化」, 『日本教育心理学会総会発表論文集 50』, 日本教育心理学会, p.561
- 三木直輝・臼井博 (2008) 「小学生の理科に関する素朴概念の修正が学習意識に及ぼす影響」, 『北海道教育大学紀要 58(2)』, 北海道教育大学, pp.159-173
- 三瀬一也・高根沢伸友・杉山健太郎・平田昭雄 (1998) 「小学校第 5 学年児童の昆虫等に関する素朴概念」, 『日本理科教育学会全国大会要項 48』, 日本理科教育学会, p.188
- 三田幸司 (1996) 「子どもの論理と科学の論理を結ぶ理科の授業(2):その 24 年「ものの温度と体積」の単元での実践から」, 『日本理科教育学会全国大会要項 46』, 日本理科教育学会, p.202

- 宮本誠史 (1996) 「子どもの論理と科学の論理を結ぶ理科の授業(2):ヒトや動物の体の単元をとおして」, 『日本理科教育学会全国大会要項 46』, 日本理科教育学会, p.204
- 無藤隆 (2007) 『事例で学ぶ保育内容<領域>言葉』, 萌文書林
- 村田佳苗・大仲政憲(2011) 「小学校理科における素朴概念を活用した学習活動に関する基礎的研究-「水溶液の性質」を通して-」, 『大阪教育大学紀要V59-2』, 大阪教育大学, pp.1-14
- 村田美由紀・松森靖夫・堀哲夫 (1996) 「子どもの考えを生かした理科学習指導の構築を目指して(D):天文概念の育成を志向する教授方策の構築(その1):日没後の太陽に関する子どもの認識状態について」, 『日本理科教育学会全国大会要項 46』, 日本理科教育学会, p.209
- 村山功 (2015) 「概念変化研究からみた教育課程編成の課題:理科教育の事例検討」, 『静岡大学教育実践総合センター紀要 23』, 静岡大学教育実践総合センター, pp.133-140
- 森本信也 (1993) 『子どもの論理と科学の論理を結ぶ理科授業の条件』 東洋館出版社
- 森山京「ゆうだち」『こくご 一上 かざぐるま』 光村図書, pp.92-97
- 八木一正・三上良太・久坂哲也, Anderson David, Nashon Samson (2006) 「遊園地を活用した物理体験学習の開発:素朴物理学の修正を促すために」, 『物理教育 54(2)』, 日本物理教育学会, pp.91-96
- 八木一正・佐々木聡也・佐藤真里 (2011) 「小学校理科における濃度概念形成の試み:宮古小学校での実践を通して」, 『岩手大学教育学部研究年報 71』, 岩手大学教育学部, pp.57-67
- 山中俊道 (1998) 「子どもの素朴概念に基づいた理科の学習:第6学年「物の燃え方と空気」の実践を通して」, 『日本理科教育学会全国大会要項 48』, 日本理科教育学会, p.142
- 山元隆春・住田勝 (1996) 「文学作品に対する子どもの反応の発達-「おにたのぼうし」の場合-」, 『国語科教育 43』, 全国大学国語教育学会, pp.60-69
- 山本千興,黒岩督 (2004) 「児童における光概念の形成に関する研究-教師のキー概念の保持及び素朴性の認知・児童の素朴概念の保持の影響を中心に」, 『学校教育学研究 16』, 兵庫教育大学学校教育研究センター, pp.49-59
- 山本義博 (2001) 「小学校理科における児童の素朴概念の変換を促す学習指導に関する研究—教師や児童の素朴概念の実態を通して」, 『学習材学研究 12』, 日本学習材学会, pp.35-37
- 緩利誠・名倉一美 (2011) 「幼稚園・保育所・小学校連携における幼児教育への期待と課題」, 『浜松学院大学研究論集 (8)』, 浜松学院大学, pp.125-139
- 吉原健太郎 (1996) 「子どもの論理と科学の論理を結ぶ生活科の授業:1年「いきものとなかよし」の単元を中心として」, 『日本理科教育学会全国大会要項 46』, 日本理科教育学会, p.195
- 呂光暁 (2015) 「児童の素朴理論を生かした小学校社会科経済学習—科学的社会認識の形成を目指して」, 『社会科教育研究 124』, 日本社会科教育学会, pp.14-26
- 少林浩道・秦明德 (1998) 「土学習材化に関する研究 I:子ども達の土壌断面観察とその理解」, 『日本理科教育学会全国大会要項 48』, 日本理科教育学会, p.70
- 鷲見辰美 (2007) 「素朴概念の壁への挑戦:温度による空気の変化」, 『理科の教育 56(12)』, 日本理科教育学会, pp.842-844
- 渡邊和幸 (2011) 「説明的文章における, 論理的思考力を高める学習活動の工夫」, 『教育実践研究 21』, 上越教育大学学校教育実践研究センター, pp.35-40
- 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 (2010) 『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について (報告)』
- 文部科学省 (2008) 『小学校指導要領』 東京書籍
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 国語編』 東洋館

- 文部科学省（2011）『生徒指導提要』
- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領』
- 文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』
- 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領解説 国語編』
- Ellin Oliver Keene／山元隆春・吉田新一郎（2014）『理解するってどういうこと？』，新曜社
- Ellis, A. / 國分康孝・石隈利紀・國分久子共訳（1996）『どんなことがあっても自分をみじめにしないためには一論
理療法のすすめ』，川島書店
- Ellis, A. and Harper R. A. / 北見芳雄監修，國分康孝・伊藤順康共訳（1981）『論理療法』，川島書店
- Ellis, A. and Raymond C.T. / 野口京子訳（2004）『怒りをコントロールできる人，できない人—理感情行動療法
（REBT）による怒りの解決法』，金子書房
- Shaun Tan / 小林美幸訳（2014）『見知らぬ国のスケッチ』河出書房新社
- Shaun Tan（2011）『アライバル』河出書房新社